

星城大学

研究シーズ集

- 経営学部
- リハビリテーション学部
- 大学院・健康支援学研究科

2012 年 9 月

星城大学 地域センター

ごあいさつ

地域センターの理念

「地域にとけこみ、地域に貢献し、地域とともに発展する。」

開学以来、多くの方々のご努力により地域交流センターが発展してまいりましたが、2011年度の組織改革の中で地域交流センターは、地域交流委員会、公開講座委員会と統合・改組され、地域センターへと生まれ変わりました。

地域センターでは、地域交流委員会にてまとめられた「星城大学地域協働戦略」や研究交流会、また、公開講座などの事業を引き継ぐとともに、星城大学の地域貢献を担うセンターとして、さらなる発展を目指していきます。

まず、地域センターは、星城大学の地域貢献を推進します。地域貢献を通して、星城大学が大学市民（地域の一構成員）として地域に溶け込み、地域や学生、教職員から誇りに感じてもらえる大学になるよう活動を行います。

そのために、特に平成23年度から24年度にかけては、学内連携を一層深めるとともに、地域との連携を提案し具現化できるよう、ゆっくりでも確実に活動を進めていきたいと思ひます。

具体的には、地域センターでは5つの事業（広報事業、大学開放事業、地域参加促進事業、協働創出事業、学生支援事業）を中心として推進していきます。

2009年度に初めて発刊された本学の研究シーズ集も本年度で改訂第5版となりました。本年度も既に、いくつかの協働プロジェクトが始動しております。どうかこの冊子をご覧いただき、ご関心をお持ちになりましたら、ぜひ、お気軽にお問い合わせください。

私たちは地域の皆様と一緒に活動できることを願っております。

どうぞよろしくお願いいたします。

2012年9月吉日

星城大学 地域センター
センター長 石田 隆城

ご連絡先

星城大学 地域センター

〒476-8588 愛知県東海市富貴ノ台2-172

Tel : 052-601-6000 (代表)

e-mail : koryu@seijoh-u.ac.jp

目 次

■経営学部

赤岡美津子 教授	: 教育カウンセリング、教育心理学、教育社会学、家族関係論、キャリア教育論	2
秋山健太郎 教授	: 経営戦略論、エネルギー・産業政策、経営学	3
雨宮康樹 教授	: 労働経済学、欧州経済論、企業経営演習	4
岩田均 教授	: 地域産業論、文化経済学、社会企業論	5
尾崎智 教授	: 保健体育科教育法、教育課程論、教職論	6
加藤省三 教授	: 情報工学、経営工学	7
北野達也 教授	: 地域医療、医療安全、医療の質、医療経営・管理、医療教育等	8
小林康男 教授	: 英文学、英国文化、時事英語	9
柴田良枝 教授	: 教職論、教育方法論、教育原理、男女共同参画	10
崔俊 教授	: 戦略経営、危機管理、技術経営	11
法雲俊邑 教授	: 経営工学、情報工学、経営情報学	12
松原隆治 教授	: 考古学、博物館学、遺跡・史跡の保存と活用	13
南川忠嗣 教授	: まちづくり論、地域活性化、農商工連携支援	14
宮川清 教授	: 広告論、広告表現論、マーケティング論、消費者行動論	15
横山正博 教授	: 人的資源管理（人事労務管理）	16
盧聰明 教授	: 経営学、組織論、企業文化論	17
天野圭二 准教授	: 環境情報論、環境経営論	18
石田隆城 准教授	: 流体力学、計算理工学、空気調和工学	19
加藤知子 准教授	: 言語、キリスト教、英語	20
神野真寿美 准教授	: 英語教育、福音主義キリスト教、異文化理解	21
鈴木愛一郎 准教授	: コーポレートファイナンス、M&A、内部監査	22
Martin Snyder 准教授	: 英語、ビジネス英語、異文化理解	23
田中英子 准教授	: 医療コミュニケーション学、感染対策学、国際看護学	24
野村淳一 准教授	: 社会システム工学、経営工学、教育工学	25
平岩恵里子 准教授	: 国際経済学、国際労働力移動	26
前田ひとみ 准教授	: 言語学、日本語学、日本語教育	27
村上美保子 准教授	: 英語教育学、言語習得論、応用言語学	28
山田正人 准教授	: マルチメディア論、都市計画学、都市・生活情報論	29
横井康博 准教授	: スポーツマネジメント、スポーツ社会学、スポーツビジネス	30
綾野真理 講師	: 臨床心理学、健康支援学、異文化適応	31
日下部直美 講師	: 現代中国語文法、中国語教育、言語学	32
長澤省吾 講師	: 運動生理学、水泳	33
坂本篤史 客員講師	: 教育心理学	34

■リハビリテーション学部

安倍基幸 教授	: リハビリテーション医学全般	36
江西一成 教授	: リハビリテーション医学、理学療法学	37
大川裕行 教授	: 理学療法学、健康支援学	38
久保金弥 教授	: 脳神経科学、神経解剖学	39
坂井一也 教授	: 精神障害者地域生活支援、精神科作業療法、障害者スポーツ、就労支援	40
竹田徳則 教授	: 高齢者健康支援学、認知症予防、老年期作業療法学、社会疫学	41
武田洋平 教授	: 辺境文化、比較文化、芸術一般	42
中島英司 教授	: 哲学、倫理学	43
Scott Petersen 教授	: 応用言語学、教材開発、翻訳論	44
山田和政 教授	: 理学療法学、健康支援学	45
George Sawa 准教授	: English	46
田邊三千廣 准教授	: 西洋史（ロシア中世史）	47
林久恵 准教授	: 理学療法学	48
藤田高史 准教授	: 日常生活活動学、健康支援学、高次脳機能障害治療学	49
古川公宣 准教授	: 運動学、電気生理学、心身健康科学	50
森川孝典 准教授	: 文化人類学、歴史学	51
飯塚照史 講師	: 整形外科(手外科)分野におけるリハビリテーション、装具療法学、作業療法学	52
大浦智子 講師	: 公衆衛生学、健康情報学、地域作業療法学	53
越智亮 講師	: リハビリテーション学、健康科学	54
富山直輝 講師	: 作業療法学	55
阿部友和 助教	: 生体工学、身体運動学、ロボット工学	56
梶原史恵 助教	: 健康支援学	57
木村大介 助教	: 老年期作業療法学、地域作業療法学	58
芝寿実子 助教	: 内部障害	59
林浩之 助教	: 作業療法学、上肢装具学、上肢バイオメカニクス	60
松岡文三 助教	: 保健医療福祉学、理学療法学	61
今井あい子 助手	: 運動老年学、応用健康科学	62
古澤麻衣 助手	: 健康支援学、作業療法学	63

■大学院・健康支援学研究科

植松光俊 教授	: リハビリテーション科学・福祉工学、運動学、応用健康科学等	65
三田勝己 教授	: 生体情報工学、神経筋生理学、健康・福祉工学	66

注1) 教員の配列は学部・職ごとの50音順。

注2) 教員からの任意の提出による（全教員の研究シーズを掲載したものではありません）

経営学部

I 専門分野

教育カウンセリング、教育心理学、教育社会学、家族関係論、キャリア教育論

II キーワード

育てるカウンセリング、自立・キャリア形成、母子関係・父子関係、自己理解・他者理解、コミュニケーションスキル

III 研究テーマ

1. 思春期クライシス
2. 母子関係・父子関係
3. 予防的開発的学校カウンセリング
4. ジェンダーと進路指導

IV 研究紹介

1. 愛着関係の有無と思春期クライシス:各発達段階に於ける愛着関係のありようが如何に人格形成に関わるのか、とりわけ思春期通過との関連性を、面接による聞き取りを通して調査している。
2. 教育によるカウンセリングのあり方:カウンセリングの思想と手法による学級経営・生徒指導・授業運営への対応により、「教師」による学校カウンセリングの在り方を調査研究している。
3. アイデンティティ形成とキャリア教育:「描画法」と「来談者中心カウンセリング」の組み合わせにより、子どもたちの語りに寄り添い続けることで、「自己理想」が顕在化する思春期に於けるキャリア意識確立のための手法を提示した。次はその追跡調査を予定している。

【参考】

■プロフィール:京都市出身、京都大学大学院教育研究科研修員修了、京都市教育委員会教育相談総合センター指導主事カウンセラー、2007年から星城大学経営学部教授、上級教育カウンセラー、ガイダンスカウンセラー、心理検査士

■担当科目:教育相談、生徒指導論、特別活動 ; 学生相談室カウンセラー

■所属学会:日本教育カウンセリング学会(理事)、日本教育心理学会、日本労務学会、京都市学校教育相談研究会(顧問)、立命館大学日本文学会

■社会的活動:家庭裁判所調停委員、日本教育カウンセリング協会 スーパーバイザー、京都市子育て支援総合センター スーパーバイザー、京都市学校教育相談研究会顧問

■主な著書・論文など

- ・『“育てるカウンセリング”による教室対応全書』2003年、図書文化社、共著
- ・「告発から解放へ・生育歴に悩む母親の子育て相談」2003年、京都市『研究紀要』、単著
- ・「“よい子”の不登校を巡って」2004年、京都市教育相談総合センター『研究紀要』単著
- ・「進路選択と決定に寄り添って」2005年、同『研究紀要』単著
- ・「心に響く“キャリアカウンセリング”のための一試行」2006年、同『研究紀要』、単著
- ・「父が気付けば:学校・家庭・専門機関の連携」2007年、同『研究紀要』、単著
- ・「女子中学生に見る、職業意識の形成」2008年、同『研究紀要』、単著
- ・「孤独な子ども・親・家族」2008年、家庭裁判所会報6月号所収、単著
- ・「思春期におけるキャリア教育の進め方:カウンセリングの理論と技法によるアプローチ」2011年、星城大学『人文研究論叢』第7号、単著
- ・「カウンセリングによるキャリア教育の試み:進路に悩む高校生の語りに同伴して」2012年、星城大学『人文研究論叢』第8号、単著

I 専門分野

経営戦略論、エネルギー・産業政策、経営学

II 研究テーマ

日本のエネルギー・産業政策

III 研究紹介

1. 日本のエネルギー政策

国益、グローバル益を考慮すると、短中期的には、安定した天然ガス供給システムの構築 (LNG とガスパイプラインの統合)、中長期的には本格的な再生エネルギーを中心としたスマートコミュニティの導入が必要となる。多面的視点から戦略を構築する必要がある。

2. スマートコミュニティ実現に向けて

国益、グローバル益の観点から戦略的に対応していく必要がある。国際標準化、社会インフラ、社会システムとしてのスマートコミュニティ、国の支援の在り方、産業構造等多岐にわたって総合的に検討していく必要がある。

3. 日本の産業政策

現在の電力業界、ガス業界、石油業界の枠組みを超えた、世界に通用する、新しい時代に適応したエネルギー企業の再編について検討していく必要がある。また、スマートコミュニティ、鉄道、水ビジネス等のインフラ事業をグローバル展開するための体制を構築する必要がある。

【参考】

■プロフィール：三重県津市出身、早稲田大学理工学部卒業、名古屋大学大学院経済学研究科博士課程修了（経済学博士）、(財)国際超電導産業技術センター調査企画部主任研究員、中部電力株式会社 四日市・緑電力センター所長、知的財産グループ長等歴任、2009 年から星城大学経営学部教授、2010 年から独立行政法人・新エネルギー・産業技術総合開発機構 (NEDO) 技術委員、北東アジア天然ガス開発利用研究会メンバー。

■担当科目：経営学原理、コーポレート・ガバナンス、経営組織論

■社会的活動：日本経済政策学会、日本経営学会、組織学会、公益事業学会、日本エネルギー学会、電気学会、国際戦略経営研究学会等、日本エネルギー研究所学術会員、NEDO スマートコミュニティ・アライアンスメンバー。

■主な著書・論文など

- ・「規制緩和下における電力会社の戦略」2005 年『日本経営学会誌』第 14 号、単著
- ・「電力会社の多角化戦略」2006 年『日本経営学会誌』第 18 号、単著
- ・「電力会社の通信事業戦略」2008 年『経済科学』55 巻、単著
- ・「持続的な競争優位の確保に向けた都市ガス会社の戦略－規制緩和への対応から国際展開へ」2008 年、『公益事業研究』60 巻第 1 号、単著
- ・「総合エネルギー企業を目指した電力会社の戦略－グローバル戦略構築に向けて－」2009 年『公益事業研究』60 巻第 4 号、単著
- ・「エネルギー企業の経営」2010 年『公益事業研究』61 巻第 4 号、単著
- ・「スマートコミュニティ実現に向けて」2011 年『公益事業研究』63 巻第 1 号、単著

雨宮 康樹 (あめみや やすき) 経営学部 教授

I 専門分野

労働経済学、欧州経済論、企業経営演習

II 研究テーマ

1. 中小企業経営者研修
2. 欧州経済・企業論

III 研究紹介

1. 経済のグローバル化が急速に進展する今日、世界的な規模で企業間競争が進行している。世界的な規模で勝ち組企業が生まれる一方で、市場競争に敗れ淘汰される企業も生まれている。このような厳しい競争環境を勝ち抜くためには、従業員一人一人に経営者としての能力が求められている。経営者として必要な能力を短期間にかつシステムティックに養成するため、経営大学院等で使われる経営シミュレーションソフトを用いた企業研修を実施している。
2. 欧州進出企業従業員に対する語学講習を含む研修会の実施
3. ドイツ、フランス企業の多国籍展開に関する研究

【参考】

■プロフィール: 愛知県出身、大阪大学大学院国際公共政策研究科博士後期課程修了 博士(国際公共政策)、Kawai Deutschland GmbH Prokurist, Kawai Nederland Managing Director, Kawai UK Managing Director を経て、2001 年 4 月より星城大学経営学部教授 愛知大学経営学部講師 (ユーロビジネス論担当)

■担当科目: マネジリアルエコノミクス (経営経済学)、国際労働、マネジリアルエコノミクス、直接投資論

■社会的活動: 日仏経営学会会員、国際経済学会会員、翠松園陶芸記念館理事

■主な著書・論文など

「フランス労働市場における賃金構造の変化と内部労働市場」「フランスホワイトカラーの賃金構造の変化」「フランス大企業におけるホワイトカラーの昇進」「年齢・賃金プロファイルの再検討」「フランス大企業における部長への昇進」「The Promotion of White-Collar Workers in Large French Firms」「昇進メカニズムの再検討」「日系製造業の対仏直接投資と撤退」「拡大 EU に伴う労働力移動と価格形成」「労働力移動の自由化と頭脳流出」「中国の EU 外交とアフリカ」「中小企業の海外進出と人材育成」「欧州中小企業のグローバル戦略」「経済危機と欧州議会選挙」「フランス企業経営者のリーダーシップ」「Les déterminants des investissements directs et des disinvestissements des entreprises japonaises en Europe au cours des vingt dernières années」

I 専門分野

地域産業論、文化経済学、社会企業論

II キーワード

近代工業文明の破局、工芸立国論、総有型経済システム

III 研究テーマ

1. 地域固有の資源を生かした産業おこしとまちづくり
2. 社会起業家の育成・支援

IV 研究紹介

1. 伝統産業・農業・商業・貿易・観光の振興、市町の総合計画や業界のビジョン策定、地域の国際化・情報化や学術研究都市の整備などに、行政・シンクタンク・大学教員の立場から携わってきました。現在は、グローバルな問題を解決するためにも、日常の暮らしや地域産業の現場からの問題解決が重要との立場から、地域固有の文化的資源を生かしたまちづくりに力を注いでいます。
2. 近代以降の大工業文明の限界を克服し、社会的な諸問題をビジネスを通じて解決する社会起業家（コミュニティビジネス、ソーシャルベンチャー、社会企業などの担い手）の育成・支援が重要です。市民・企業・行政・経済団体・大学教職員・学生・OBやOGなどの有志が気軽に集まり、本音の真摯な議論ができる創造的な公共空間づくりを目指します。ご関心のある方は、気軽にお問い合わせください。

【参考】

■プロフィール: 神戸市生まれ、京都大学経済学部卒業、京都府庁(中小企業指導所、農林部農政課、企画部企画室、東京経済情報センター所長、文化芸術室参事、商工部観光・商業課長)、(株)シンクタンク宮崎、(株)地域社会研究所、京都大学大学院経済学研究科修了(経済学修士)、京都橘大学大学院文化政策学研究科博士課程単位取得後退学、2002年から星城大学経営学部教授

■担当科目: 文化経済論、地域産業論、観光事業論、事業貢献論、コミュニティビジネス論など

■社会的活動: 文化経済学会、日本労務学会、組織学会、経営学会、NPO学会などに所属。東海市産業育成会議議長、東浦町社会教育委員、知多市観光協会岡田支部顧問など。

■主な著書・論文など

- ・「文化への公的支援」池上惇他編『文化経済学を学ぶ人のために』1993,世界思想社,所収
- ・「中小企業の金融問題」藤田敬三他編『中小企業論(第4版)』1998,有斐閣,所収
- ・『産地再生戦略～伝統的産業集積の創造的革新～』1998,地域社会研究所
- ・『京都発・商店街の将来展望』2001,京都商店街振興組合連合会
- ・『新時代の都市経営』2001,大学コンソーシアム京都(共編著)
- ・「地域産業の興亡」赤岡功他編著『経営戦略と組織間提携の構図』2005,中央経済社,所収
- ・「新時代の産官学連携」球相材料研究会編『球相炭化物材料』2006,日刊工業新聞社,所収
- ・「職人仕事の本質－仕事による人間の成長－」『立命館経営学』(48巻4号)2009,所収
- ・「地域力を育む大学の役割－実践を通じての考察－」『星城大学研究紀要』(第9号)2010,所収
- ・「職人仕事は現代産業の限界を突破するカギ」『日本政策金融公庫調査月報』(No.023)2010,所収
- ・「工芸立国試論－人間の労働の復活－」日本労務学会中部部会報告、2011年5月
- ・「伝統工芸職人論」文化政策セミナー講演、2011年9月
- ・その他、書評(大阪経済大学中小企業経営研究所『中小企業季報』)、論説(京都新聞「経済天気図」)、受託研究報告書(行政・経済団体)など多件。

I 専門分野

保健体育科教育法、教育課程論、教職論

II キーワード

保健体育科教育、教育課程、教育実習、教職課程

III 研究テーマ

1. 一人一人の個性、能力に応じた保健体育科教育の指導法
2. 実践的指導力豊かな資質を育てる教職課程の在り方

IV 研究紹介

1. 新しい学習指導要領において、保健体育科の基本方針は、小学校、中学校、高等学校の 12 年間を見通した指導内容の体系化を図り、指導内容の確実の定着、体力の向上を重視、基礎的な知識・技能の育成に力点が置かれています。こうした新しい方針に則り、確かな学力を育むための保健体育科の指導法は、運動の特性をより明確にし、指導計画及び指導法の工夫や学習活動に生きる評価のあり方が求められます。

そこで、本学の保健体育科教育法の研究では、生徒一人一人の個を伸ばす指導のあり方に力点を置き、生徒の実態や課題意識を基に、生徒一人一人が課題に応じた練習方法や指導計画を立案できるための指導の在り方をきめ細かく追究したいと考えています。また、各運動種目に応じた学習形態のあり方や教材・教具の工夫など、より学校現場で生きる実践的な指導法の研究を進めていきます。

2. 学校の教育課程は、学校の共通の目標に向かって、児童生徒をよりよく成長させるための総合的な教育計画です。この学校運営の共通基盤となる教育課程の編成のあり方について、関係法令を基に、その編成の手順、実施の在り方、評価などについて基礎的に学ぶとともに中学校、高等学校現場の生きた実践を例にしながら特色ある学校づくりの在り方を追究していきます。より充実した教育課程の編成は、常に計画・実行・評価・改善のサイクルが有効に働き、生徒一人一人の自己実現が支援されているかにかかってきます。本学の研究では、このように生徒の立場に立った教育課程論を考え、より実践的な学校現場で生きて働く研究に視点を置いて進めたいと考えています。

【参考】

■プロフィール：愛知県西尾市生まれ、愛知教育大学教育学部保健体育科卒業、愛知県教育センター研究指導主事、愛知県教育委員会教職員課主査、一色町立一色中部小学校長、愛知県教育委員会豊田加茂教育事務所次長、西尾市立一色中学校長を経て、2012 年より星城大学教授

■担当科目：保健体育科教育法 I・II、スポーツ行政論、教育課程論、教育実習、スポーツ実技 I（体操・陸上）

■社会的活動：愛知県体育協会理事、愛知県スポーツ振興審議会委員、愛知県中小学校体育連盟会長、東海中学校体育連盟会長、日本中学校体育連盟理事等を歴任

■主な著書・論文など

- ・「授業を創る」（明治図書）1990 年、研究同人
- ・「学び続ける授業」（明治図書）1993 年、研究同人
- ・「地域に根差した総合学習」（黎明書房）2000 年、研究同人
- ・「小中一貫（生活・総合）の学び」（黎明書房）2005 年、研究同人

I 専門分野

情報工学、経営工学

II キーワード

IT 経営、要求・要件定義、IT コーディネータ制度、中小企業、IT 投資

III 研究テーマ

1. 経営と IT 技術をつなぐコンサルティング
2. IT コーディネータの実践的活用法

IV 研究紹介

1. IT 経営を進める上で必要となる経営サイドからの要求定義と、システム化に必要な要件定義をどのように取り纏めるかは、その情報システム開発の成否に直結する重要なプロセスです。本テーマでは、この要求・要件定義を効率的に取り纏めるための、経営と IT 技術をつなぐコンサルティングについて、具体的なシステムを取り上げて事例研究を行うものです。
2. 経済産業省が 2001 年からスタートした IT コーディネータ制度は、その制度の定着と合わせ IT コーディネータの資格保有者も約 6,500 人に達しています。また、全国各地には活動拠点となる NPO 法人も多数発足して、地域での密着した活動が展開されています。一方、中小企業を取り巻く経営環境は急速に変化してきており、この IT コーディネータ制度を十分活用しきれていない現状があります。本テーマでは、こうした中小企業にとって真に経営に役立つ IT 投資を推進するための、IT コーディネータの実践的活用法について研究するものです。

※中小企業の IT 化推進や IT 経営に関心をお持ちの方は、気軽にお問い合わせ下さい。

【参考】

- プロフィール：岐阜県出身、福井大学大学院工学研究科博士後期課程修了。日立エンジニアリング（株）ソフト開発システム部長、同情報システム本部シニアエキスパート、福井高専教授を経て、2011 年から星城大学教授。博士（工学）、技術士（情報工学・経営工学・総合技術監理）。
- 担当科目：e ビジネス論、電子決済論、経営情報論、ビジネスモデル論、IT 経営実践セミナーなど
- 社会的活動：日立技術士会広報委員、情報処理学会北陸支部評議員、福井県内各種委嘱委員などに従事。日立技術士会、日本技術士会、情報処理学会、電気学会に所属。
- 主な著書・論文など
 - ・「IT コーディネータの実践的活用」2002 年、茨城県中小企業振興公社編『Wing21 いばらき』12 月号、単著
 - ・「IT 専門家を徹底活用」2003 年、茨城新聞社編『元気の出る中小企業経営』第 2 章 4 節、単著
 - ・「統計的品質管理」2006 年、オーム社編『技術士ハンドブック』5・4 章、単著
 - ・"An Evaluation of New Method to Convert Non-segmented kana Strings to kanji-kana Strings Using Markov Chain Model" *Proc. International Conference on Electrical Engineering 2008*, 2008, 共著
 - ・「かな単語マルコフ連鎖モデルを用いたかな漢字変換法」2010 年、電気学会編『論文誌 C』130 巻 6 号、共著
 - ・"Kana-to-kanji conversion method using Markov chain model of words in bunsetsu" *Proc. 2010 4th International Universal Communication Symposium*, 2010, 共著
- その他
 - ・関連保有資格：情報処理技術者（第一種・特種）、ITC 協会認定 IT コーディネータ、経営品質協議会認定セルフアセッサー
 - ・JETRO 活動：1997 年度輸入商品発掘専門家（ソフトウェア）、2002～2003 年度国際テクノビジネスフォーラム・コーディネータ（IT 分野）

I 専門分野

地域医療、医療安全、医療の質、医療経営・管理、医療教育 など

II キーワード

住民力養成、地産地消活性化、地域社会貢献活動、自治体支援 など

III 研究テーマ

1. 自治体病院支援のための ERM 導入と SRI (社会貢献投資) システムの開発
2. 地域におけるメタボリックシンドローム対策調査・啓発に関する研究
3. 医療安全管理のためのハイリスク・パス分析モデル開発と検証

III 研究紹介

1. 自治体病院の 91.4% (2008 年) が赤字運営です。地域医療を担う自治体病院を継続運営するためには、内部統制は勿論、医療の質・安全管理について客観的評価を下すことのできる第三者評価機関設置、さらには、社会貢献投資 (SRI) 型自治体病院運営体制を提案したいと考えております。地域医療改革を具現化するためには、地域住民の方々の住民力 (住民の自治能力) なくして成立しません。地域の皆さんと一緒に取り組んでいきたいと思っております。
2. 医療の質・安全管理体制を客観的に評価するための医療の質・安全管理モニタリング分析ツールを開発し、各医療機関に対し分析評価のフィードバックを実施しています。自治体病院支援、地域健康増進普及活動など、地域医療支援に関するご相談などに積極的に対応します。

【参考】

■プロフィール:福岡県北九州市生まれ、小・中・高校時代を東海市で過ごす。九州大学大学院医学系学府医療経営・管理学専攻修士課程修了 (医療経営・管理学修士)。九州大学大学院医学系学府環境社会医学専攻医療システム学講座 医学博士課程。各病院において医療安全管理部部長 (Patients Safety Manager として医療事故調査、院内安全管理体制再構築。)、公益財団法人日本医療機能評価機構、医療事故防止センター初代医療事故防止事業課長、病院長補佐 (特命任務: 院内質改善、経営改善等病院再建) 歴任。現在、兼職にて社会医療法人宏潤会大同病院医療安全管理顧問、神戸医療経営学研究所客員研究員 (医療オペレーションマネジメント専門)、自治体病院再建、医療機関 5 施設において医療経営・管理顧問、オブザーバー、九州保健福祉大学保健科学部非常勤講師、藤田保健衛生大学医学部客員教授など務める。

■担当科目:地域医療学、医療環境教育学、患者安全管理学、医療オペレーションマネジメント論、社会保障論、メディカル・リスクマネジメント論、医療・福祉支援学、医療安全管理学特論、生活環境学特論Ⅱ、ほか。

■所属学会:医療の安全に関する研究会 (常任理事)、日本医療経営学会、日本医療・病院管理学会、医療の質・安全学会、日本医学教育学会、日本医療教授システム学会、日本航空医療学会、日本医工学治療学会 (評議員)、日本医療機器学会 (評議員)、神戸医療経営学研究会客員研究員、モデル&シミュレーション医学教育研究会、財団法人国家基本問題研究所 ほか。

■社会的活動: 医療の安全に関する研究会 常任理事、東海病院管理学研究会 世話人、日本医工学治療学会 評議員、NGO 国際医療協力プロジェクト 副理事長、社会医療法人宏潤会大同病院 顧問、地域医療支援プロジェクト 代表

■主な著書・論文など

- ・「知多半島の地域医療をみんなで考えよう！」series community medicine ,Step 連載, 5月号P73、8月号P67、11月号P73、2月号P53
- ・藤原奈佳子, 北野達也, 医療安全管理体制の実態と安全管理研修のあり方に関する調査研究, 医療の安全に関する研究会第 16 回研究大会, 2010. 6, pp1-6
- ・「医療安全を捉え直す～医療事故ゼロを目指して～」北野 達也、News letter, No.30, P3-P5, 2010.11.25
- ・「医療安全情報管理の現状分析」関田 康慶、柿沼 倫弘、北野 達也、他 医療情報学 P1-P4, 2010.11.9
- ・東京都主催医療安全管理体制支援事業「医療安全管理者養成講座テキスト」北野 達也、P20-P53, 2008.12.4
- ・「医療におけるコミュニケーションと医療安全～患者安全管理の手法～」北野 達也、安全医学, Journal of Medical Safety, Vol.4(2):P17-P21, 2007.11.30

小林 康男 (こばやし やすお) 経営学部 教授

I 専門分野

英文学、英国文化、時事英語

II キーワード

戯曲、英国文化、時事英語

III 研究テーマ

1. シェイクスピアの戯曲
2. 英国文化
3. 時事英語

IV 研究紹介

1. シェイクスピア悲劇の言語・技巧的研究
2. 英国文化研究
3. 時事英語

【参考】

■プロフィール：埼玉県八潮市生まれ、東京都立航空工業高等専門学校、愛知大学文学部卒業、愛知教育大学大学院修士課程修了、2003 年から星城大学経営学部教授

■担当科目：英語 I・II・III・IV、文学、時事英語、文化教養ゼミ I・II、キャリアサポート I・II、社会探索ゼミ

■社会的活動：日本シェイクスピア協会会員 リネッサンス研究所会員 片平会会員
愛知教育大学英語英文学会会員

■主な著書・論文など

- ・『田中幸穂先生退官記念論集』1988 年、桐原書店、共著
- ・『ことばの地平』1995 年、英宝社、共著
- ・『英語・英文学の風』1996 年 金星堂、共著
- ・『ことばのシンフォニー』1999 年 英宝社、共著
- ・「英国紅茶王・リプトン小伝」2003 年、名古屋明德短期大学紀要第 18 号、単著
- ・「シェイクスピア研究の手法」ー日本シェイクスピア協会の研究発表よりー、2007 年、星城大学人文論叢 第 3 号、単著
- ・「ロミオとジュリエット」映画化された 3 作品の比較（研究ノート）2010 年、星城大学人文研究論叢 第 6 号、単著

I 専門分野

教職論、教育方法論、教育原理、男女共同参画

II キーワード

教職、教育方法、教育実習、男女共同参画、話し方書き方

III 研究テーマ

1. 学習意欲を高める指導方法の研究
2. 男女共同参画意識を育てる指導法の研究

IV 研究紹介

1. 本学は経営学部で教職課程を有しています。スポーツマネジメントコースでは、中学校・高等学校教諭一種免許（保健体育）が、マーケティング・会計ファイナンス・女性キャリアマネジメント・国際ビジネス・観光まちづくり・医療マネジメントのコースでは高等学校教諭一種免許（公民）が、IT 経営コースでは高等学校教諭一種免許（情報）がそれぞれ取得できます。

教員は学級経営や授業クラス経営において、いかに生徒の心を引き付けるか、いかに学習意欲を高める指導をするかが大切です。そこで、生徒の学習意欲を引き出すための教育方法の研究や、生徒の心に響く話し方書き方の研究は、本学の学生にふさわしい研究だと考えます。

作成した学習指導案を基にした模擬授業では、生徒が授業に集中できたか、どのような発問の仕方がより生徒の関心を引き出すか等、授業の分析を基にして研究しています。

2. 男女共同参画社会の実現に向けて、愛知県女性総合センター（ウィルあいち）が開館したのは、平成 8 年（1996 年）5 月 30 日。私は初代情報相談課長として、世界に情報を発信し、自立を目指す女性の相談をまとめました。現在、日本では男女共同参画社会という言葉は徐々に知られるようになりましたが、まだまだ男女共同参画意識が浸透しているとは言えません。

世界の人々との交流が盛んになった今は、職場やスポーツ等あらゆる場面で男女共同参画意識の重要性が強調されています。このような現状を踏まえて、男女共同参画意識を育てる指導法について研究しています。そして、男女共同参画意識を持つとはどのようなことかについて、講演会や研修会で講師をしています。

【参考】

■プロフィール：愛知県蒲安市生まれ、愛知教育大学教育学部国語科卒業、愛知県女性総合センター（ウィルあいち）初代情報相談課長、愛知県立豊田高等学校長、愛知県立豊田北高等学校長を経て、2011 年より星城大学教授

■担当科目：教育原理、教職論、教育方法学、教育経営論、教育実践演習、総合演習、教育実習Ⅰ・Ⅱ、事前事後指導

■社会的活動：JRC（青少年赤十字）委員

■主な講演など

- ・みよし市 女性応援セミナー講師 2010 年 12 月
- ・岡崎市 職員研修会講師 2011 年 2 月
- ・南知多町町制 50 周年記念講演会講師 2011 年 12 月
- ・豊田市立小原中学校人権講話講師 2011 年 12 月
- ・北名古屋市長職員研修会講師 2012 年 1 月
- ・東海郵政退職者共助会講演会講師 2012 年 5 月

I 専門分野

戦略経営、危機管理、技術経営

II キーワード

危機管理、自己防衛能力、大学経営

III 研究テーマ

1. 持続性を高める戦略的危機管理の枠組みのその実践原理
2. 大学経営における戦略経営と危機管理

IV 研究紹介

1. 現代企業経営においてはただ一回の戦略的選択の失敗がただちに企業の存続をも左右する致命的な危機に繋がる。特に 21c に入ってから、食品偽装の問題を始めとする不祥事が多発しているし、またリーマンショックに端を発する世界規模の経済危機によって経営環境の不確実性がさらに高まっている中で、今年 3 月に起きた東日本大震災を契機に、企業経営のみならずあらゆる組織の経営における危機管理がその重要性を増している。このような経営環境の中では、予期せぬ事態に対応できる自己防衛能力を強化するのが、持続可能な経営を実現するにあたって何よりも大事な経営課題になる。このような認識に基づき、組織の本質的な危機誘発要因の観点から、組織の持続性を高める経営の枠組みと実践原理としての戦略的危機管理の実践原理に注目する。
2. 今大学経営は大きな転換点を迎えている。少子化に伴う経営環境の悪化に加え、入学者の基礎学習能力の低下に伴って大学教育の本質的な在り方に対する混乱が生じている。大学経営は明確な戦略的な方向性を見失ったまま目先の経営状況を乗り越えるための苦肉策が乱発される中で右往左往している。組織の経営戦略、危機管理の観点から今後の大学経営のあるべき姿を探る。

【参考】

■プロフィール：韓国ソウル出身、京都大学大学院経済学研究科博士後期課程修了、経済学博士(経営学専攻)、韓国ポスコ経営研究所経営戦略部門リーダー(研究委員)、DBM Korea 主席コンサルタント、韓国漢陽大学デジタル経営学部/産業大学院、情報通信大学院非常勤講師を経て、2004 年から星城大学経営学部教授

■担当科目：経営戦略論、危機管理論、技術経営

■社会的活動：組織学会、経営学会、日本リスクマネジメント学会、日本労務学会、賃金学会、愛知人事問題研究会、在日韓国人研究者フォーラムに所属。

■主な著書・論文など

- ・危機管理論序説、1995.4、「調査と研究」、第 8 号、京都大学
- ・組織環境の特性とその意味付けの連鎖、1996.2、「経済論叢」、第 157 巻 第 2 号、京都大学
- ・大学危機の本質と対応-韓国大学の現状とその対応から学ぶ-、2007.9、星城大学「研究紀要」第 4 号、星城大学
- ・『企業危機管理の実践原理』(韓国語版)、2001 年 4 月、芸元出版社(韓国)
- ・『経営戦略と組織間関係の構図』(共著)、第 13 章：戦略的危機管理、2005 年 3 月、中央経済社
- ・「日本企業の創造性」(共著)、創造的組織創り・創造的組織革新の条件-、2008 年 12 月、三恵社
- ・「日本の大災害から学ぶ危機管理の教訓」、2011.6, KOREA PR.review 第 57 号、韓国 PR 協会

I 専門分野

経営工学、情報工学、経営情報学

II キーワード

工業経営、RFID システムの開発、企業の基幹システム、水源の里の活性化

III 研究テーマ

1. RFID による地産品の出荷管理と追跡情報に関する研究
2. 過疎化農村地域のまちづくりと地域資源(空き家)等の利活用

IV 研究紹介

1. 地域主権の時代が叫ばれ、地域固有の産業育成が急を要しています。地域資源の活用や地域ブランド振興などの施策が展開されていますが、現実には国内製造業の空洞化はいつそう進んでいます。また、TPP 問題も農業には大きな課題を投げかけています。このような状況の中で、地域の特産品を出荷して消費者の購買に結びつけるには、付加価値のつく販売方法と新ルートの開拓が不可欠だと思います。

今、新しいトレーサビリティのあるツールとして RFID という電子タグが注目を集めています。工業製品や農業製品にこの電子タグを添付して、出荷管理、品質管理や搬送ルート of 管理を行なうことにより、出荷の省力化・品質の維持・搬送中の情報収集等、付加価値の高い産品出荷が可能になります。私は、このような分野で国内のみならず、中国の大学や企業とのシステム開発に取り組んで研究を進めています。関心のある方にはご相談に積極的に対応します。

2. 少子高齢化が進み、日本の人口は都会に集中する傾向にある中、地方の農山漁村は人口がどんどんと減少しています。このまま行けば、将来は村がどうなるのだろうかと不安に思っている人も少なくないと思います。私の地域もそのような傾向にあり、地元の皆さんとともに「過疎化農村地域のまちづくりと地域資源(空き家・空き地)等の利活用」をテーマに研究活動を行っています。具体的には、数カ村が集まった懇話会を立ち上げ、都会と田舎を結ぶ交流イベントの開催、農家民泊の実施などさまざまな事業を実施しています。これらの取組みにより地域の皆様が生き活きた生活を送ることのできる地域づくりを継続してゆきたいと考えています。

このような研究や活動に関心をお持ちの方は、お気軽にお問い合わせください。

【参考】

■プロフィール：滋賀県米原市生まれ、ノースウェスタン大学客員研究員、滋賀大学、龍谷大学の教授を経て、2003 年から星城大学経営学部教授。中国湖南工学院大学名誉教授。

■担当科目：情報ネットワーク論、ビジネスモデルコンピューティング論、情報教科教育、情報倫理、ゼミナール 2 年・3 年・4 年、IT 経営実践セミナー

■社会的活動：京都新聞「経済天気図」コラム欄, 12 年間執筆、近畿電気通信監理局研究会座長、滋賀県工業技術センターアドバイザー、産業産地診断員、中小企業事業団・情報化アドバイザー、中小企業団体中央会アドバイザー等経験、米原市まちづくり懇話会座長、いざない湖北定住センター理事長、米原市社会福祉協議会委員、同市人権保護委員会委員、同市青少年育成委員会委員、同市区長連合会役員、同市条例策定委員等

■主な著書・論文など

著書●『企業情報システム論』1987 年, 杉山書店, 単著 ●『経営工学』1989 年, オーム社, 単著

●『現代工業経営学』1982 年, 有信堂, 共著 ●『新しい情報ネットワーク教科書』2010 年, オーム社, 監修

●『工業経営における人・組織・技術』2011 年, 学文社, 共著、他多数。

論文●「グローバル・システム統合環境における情報セキュリティ管理の課題」星城大学「研究紀要」第 8 号, 2009 年 9 月

●「RFID の普及に関する一考察」星城大学「研究紀要」第 9 号, 2010 年 3 月

●「RFID を活用したデータウェアハウス構築の一試案」, 星城大学「研究紀要」第 10 号, 2012 年 3 月、他論文 70 数編。

I 専門分野

考古学、博物館学、遺跡・史跡の保存と活用

II キーワード

まちづくり、まちの魅力再発見、文化財

III 研究テーマ

1. 歴史的な文化財を活用したまちづくり

IV 研究紹介

1. 私は観光まちづくりコースのゼミナールを担当しています。考古学が専門ですので、長年にわたって遺跡や史跡の保存と活用について関心を持ち続けてきました。まちづくりに関しては、このところ、重要伝統的建造物群保存地区指定地域を見学すること、まちづくり株式会社の活動を調べること、などを行っています。
2. 個人的には、知多地域のマンボ（横井戸）の情報をあつめ農業土木遺産として保存することを目指しています。知多半島のマンボはおそらく江戸時代末から明治時代にかけて作られた、ため池に伴うトンネル状の導水路ですが、ひょっとすると西アジアのカナート、中国のカレーズに起源があるかもしれない貴重な遺構です。マンボをまちおこしのための観光資源に出来るかもしれません。
3. 全国にはまちづくりにかかわっている大学がかなりあります。大阪人間科学大学の片寄俊秀先生を代表世話人とする全国まちづくりカレッジ（略して、まちカレ）が、今年度は昨年 10 月 22 日に京都府宇治市にある京都文教大学でプレまちカレが開催され、今年の 3 月初めには全国まちづくりカレッジ in 沖縄 2012 が開催予定です。少しずつですが、全国各地のまちづくり活動の情報を集めています。星城大学の地元でまちづくり活動を行いたいと考えています。

【参考】

■プロフィール：愛知県春日井市在住、南山大学文学部卒業、南山大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学、1985 年から（財）愛知県埋蔵文化財センター調査研究員、1993 年から名古屋明德短期大学国際文化科専任講師、1997 年同助教授、2003 年から星城大学助教授、2008 年から同教授

■担当科目：文化教養ゼミ、ゼミナール（観光まちづくり）、考古学、博物館学

■社会的活動：東海市文化財調査委員、春日井市文化財保護審議委員、愛知県史調査協力員、国士舘大学イラク古代文化研究所共同研究員

■主な著書・論文など

- ・「野外考古学にあけるデジタルカメラの活用についてーオラーン・オーシグ I 遺跡の発掘調査よりー」
- ・『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』pp.345-360、伊藤秋男先生古希記念考古学論文集刊行会、2007 年
- ・「知多半島のマンボ（1）」『研究報告 とうかい』創刊号、pp.81-89、東海市教育委員会、2007 年
- ・「知多半島のマンボ（2）」『研究報告 とうかい』第 2 号、pp.50-53、東海市教育委員会、2009 年
- ・「知多半島のマンボ（3）」『研究報告 とうかい』第 3 号、pp.24-31、東海市教育委員会、2011 年

I 専門分野

まちづくり論、地域活性化、農商工連携支援

II 研究テーマ

1. 農商工連携等地域資源を活用した地域の活性化に関する研究
2. 中心市街地活性化とまちづくりに関する研究
3. 商工会のあり方に関する研究

III 研究紹介

1. 地域主権の時代が叫ばれ、地域資源の活用や地域ブランド振興などの施策が展開されていますが、現実には地域における産業の疲弊と衰退が急速に進行しています。地域には、農・漁・林業や製造業、商業等が存在しそれぞれの活性化に取り組んでいるものの、それらが地域として有機的に連携している例は少ない。中小企業者と農林漁業者が連携し、それぞれの経営資源を有効に活用して取組み地域活性化の可能性を探ることが重要だと考えている。

私は、全国中小企業中央会が各地で実施している「農商工連携等支援専門家の育成」研修会を修了し、「農商工連携等支援専門家」として登録し各取り組みの相談に応じている。

2. 郊外への商業集積が進み、都市の顔としての中心市街地の空洞化が進行し、まちの活力や賑わいが失われています。このままでは生活利便性の低下や、生活空間としての魅力の喪失、公共サービスの低下、都市を運営するコストの増大が引き起こされます。私は、まちの生活拠点を再生し、次世代あるいは増加する高齢者を含めた多くの人々にとって住みよい快適なまちづくりとは何かを問い続け、その取り組みのあり方を研究しています。全国のまちづくりの現状を調べに飛び回っていますのでそれぞれの地域に応じた活性化の取り組みの相談に応じることが出来ます。
3. 地域の中小企業者の経営改善に関する相談とその指導、地域内の経済振興を図る諸活動を展開に大いに貢献してきた商工会は、会員企業の経営の悪化、会員の減少、国・地方公共団体からの補助金の削減の中にあってその存在意義を問われている。大阪府の商工会連合会の課題調査研究委員会での調査研究を踏まえて商工会のあり方、本来の活動を選択と集中によって会員の期待に沿う商工会として生き残っていく方策を研究し、その相談にも乗っている。

【参考】

■プロフィール：石川県能登地方生まれ、関西大学商学部卒業、大阪府立産業開発研究所主任研究員、沖縄大学教授、2002年から星城大学経営学部教授

■担当科目：経営学概論、まちづくり論、流通基礎論、中小企業経営論

■社会的活動：東海市中心市街地活性化基本計画策定委員長、東海市公の施設指定管理者選定委員会委員長、大阪府商工会問題調査研究委員会委員長など各種委員会委員を務めている。

■主な著書・論文など

・『販売戦略ノート』、『販売促進のアイデア・事例集』、『卸売マーケティング』、『現代企業総論』等の書籍、いずれも共著

宮川 清 (みやかわ きよし) 経営学部 教授

I 専門分野

広告論、広告表現論、マーケティング論、消費者行動論

II キーワード

マーケティング、広告、ブランディング

III 研究テーマ

1. 「お詫び広告」の調査研究
2. 企業イメージとブランド構築についての研究

IV 研究紹介

1. 企業不祥事発生時における日米の「お詫び広告」を収集し、その表現手法等の分析を行っている。日本における「お詫び広告」の歴史も合わせて研究している。
2. ブランド構築の構成要因の分析から、構築概念「C P と P P」を理論化し、提唱している。

【参考】

■プロフィール：神奈川県出身、(株)博報堂シニアプロデューサー、九州産業大学大学院芸術研究科博士後期課程修了、博士（芸術）、2007 年から星城大学経営学部教授

■担当科目：広告論、マーケティング、マーケティング・リサーチ、消費者行動論

■所属学会：日本広告学会（論集編集委員会副委員長・クリエイティブ委員、学会賞選定委員）、日本デザイン学会、芸術工学会

■社会的活動：総理府・国政に関する広報委員会委員、JFMステレオCM広告賞審査員、フジサンケイ広告大賞審査員、仙台広告賞審査委員長、藤枝市企業誘致審議会委員長、藤枝商工会議所未来塾講師、FM静岡（K-MIX）番組審議委員会委員、K-MIX・CMコピーコンテスト特別審査員、東海市高齢者大学講師、静岡県CMグランプリ審査員（静岡県広告協会）等歴任

■主な著書・論文など

- ・『マーケティング・コミュニケーション』2009 年、清水公一編著、五紘舎、共著
- ・「企業不祥事における企業表現～日米のケーススタディーから見る「お詫び広告」の実践的な方向性の模索「現状と課題」～」2009 年、(財)吉田秀雄記念財団平成 21 年度（2009 年）第 43 次『助成研究集』所収、共著
- ・「企業理念とブランド構築」2006 年、日本広告学会『広告科学』第 47 集所収、単著
- ・「IT 時代における企業イメージの構築」2001 年、日本広告学会『広告科学』第 43 集所収、単著
- ・「企業不祥事と企業表現」2002 年、日経広告研究所『日経広告研究所報』第 207 号所収、単著

I 専門分野

人的資源管理（人事労務管理）

II キーワード

人的資源、リーダーシップ、モチベーション、創造性、アイデンティティ

III 研究テーマ

1. 組織・従業員のアイデンティティと組織の創造性
2. 非正規労働者の増加の効果と課題

IV 研究紹介

1. グローバル化が進展する中で、企業の付加価値をいかに高めるかが課題ですが、価値は顧客が決めるもので、消費者でもある従業員の創造性が不可欠です。そこで、企業は従業員のアイデンティティをもとに企業の創造性を高めるメカニズムを研究しています。
2. 非正規労働者が労働者の3分の1を占め、基幹労働力化しております。非正規労働者は人件費の削減というメリットの反面、差別的労働、不安定労働という問題もあります。これら非正規労働者の意義と課題を研究しています。

【参考】

■プロフィール：兵庫県明石市生まれ、京都大学大学院経済学研究科修士課程修了。

兵庫県職員として、税務、青少年健全育成を担当後、企画参事付、県民局県民課長、県立労働経済研究所主任専門員、21世紀ひょうご創造協会地域政策研究所主席研究員などを歴任。

2003年から星城大学経営学部教授、2007年度 教学部長、2008年度～2011年度 経営学部長、2012年度学長補佐

2012年度は、星城大学開学10周年記念事業の実行委員会副委員長を担当し、その企画・実施を推進。

■担当科目：人的資源管理論、人材開発論、モチベーション論、リーダーシップ論

■社会的活動：日本労務学会、日本経営学会、人材育成学会 会員

■主な著書・論文など

- ・『人的資源管理の基礎と展開』2005年、中央経済社、単著
- ・『労務管理と人的資源管理の構図』2005年、中央経済社、共著
- ・『日本企業の創造性』2008年、三恵社、共著
- ・『創造的組織とモチベーション』2011年、三恵社、単著
- ・「パートタイム労働の基幹労働力化の背景と方向」1997年、『大原社会問題研究所雑誌』No469 単著
- ・「創造的モチベーションの要因について」2009年、『星城大学研究紀要』第7号、単著
- ・「創造性における自己実現欲求と価値について」2010年、『星城大学研究紀要』第9号、単著

I 専門分野

経営学、組織論、企業文化論

II キーワード

国際経営、華人経済、大学の国際化

III 研究テーマ

1. 華人経済圏における日系企業の進出戦略と実務
2. 海外の高度教育研究機関による複合的・有機的連携関係に関する調査研究

IV 研究紹介

1. 華人経済圏（主に中国、台湾、香港、東南アジアなどの地域）における進出コンサルティング経験も持っているため、共同研究のみならず、関連する実地調査やFS (feasibility study) の作成、JV (Joint Venture) のファインディングや事業運営のアドバイスなどにも対応することができます。本学の国際ビジネスコース「国際ビジネス実践セミナー」にて、海外の第一線で活躍されている企業の経営者や管理者を招いて学生に実践的な講義を行って頂いているので、若者に国際経営の現実を語って頂ける方は是非ご一報下さい。
2. 2010年4月に経済産業省と文部科学省は大学や企業が人材のグローバル化を進めて、国際的な日本の存在感向上に繋げるべきだとする提言をまとめた。社会問題の複雑化と多様化に伴って、知識基盤社会を多様に支える高度で知的な素養のある人材の育成に当たって、大学教育の現場においても国際的な連携や産学連携が重要なキーワードとなっている。本研究は前述の時代要請に応えるためのものだと位置づけたく、海外の高度教育研究機関との複合的・有機的な展開の可能性を探り、従来型の2校間協定による交流とは異なる教育プログラムを行い、真のグローバルなネットワークの構築をはかりたい。将来的には、既存の提携校に加えて、総合的な連携によるコンソーシアム形式の交流や海外インターン、オンラインによる授業交換などを実現し、大学経営と学生教育の活性化にも繋げたいと狙っている。

【参考】

■プロフィール：1958年台湾・台北市生まれ。京都大学経済学部卒業、同大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。1991年に三和総合研究所（現「三菱UFJ Research & Consulting株」）金融戦略部研究員（正社員）として入社。同社の国際経営開発部、企業戦略室のシニアコンサルタントを経て、2002年4月から星城大学経営学部教授・国際ビジネスコース専攻長。日本経営学会、組織学会、日本労務学会、日本台湾学会、日本中国経営管理学会の会員。

■担当科目：グローバルマネジメント、ベンチャービジネス論、海外ビジネスセミナー、国際ビジネス実践セミナー、文化教養ゼミ、ゼミナール など。

■社会的活動：留日名古屋華僑総会理事、道恒環境科技（北京）有限公司監査役、株式会社松本微生物研究所取締役。

■主な著書・論文など

- ・「環境保全と教育事業は今後も中国の有望なビジネス分野であり続ける」2009年みずほ銀行『みずほ中国 法務・税務・労務ヘッドライン』No.3、単著。
- ・「日本の大学国際化と国際教育の発展趨勢」2008年、台湾『東亞論壇季刊』No.462、単著。
- ・『労務管理と人的資源管理の構図』、2005年、中央経済社、共著。
- ・「近年における日本企業の対中企業戦略の変化と動向」2005年・星城大学経営学部『研究紀要』No.2、単著。
- ・「中国の私営企業とベンチャービジネス ―躍進する私営企業とその課題―」2004年・全国日本学士会『アカデミア』No.86、単著。
- ・『活路を拓く台湾産業』2002年、財団法人交流協会、共著 など。

I 専門分野

環境情報論、環境経営論

II キーワード

国際関係論、知識基盤社会、産学官連携、リスク、シリアスゲーム

III 研究テーマ

1. ヨーロッパにおける知識基盤経済転換に向けての産学官連携モデルに関する実態調査研究
2. 社会教育におけるデジタルゲーム（シリアスゲーム）の活用

IV 研究紹介

1. 地方が産業振興を実現する経路はケースバイケースですが、一つの方法論に、その地方にある知的資源の活用があります。私が専門にしてきた北欧では、10 万人程度の規模の都市で次々とベンチャー企業を生み出し、世界でも有数の産業集積を実現させている地域があります。このような産業集積はどのような取り組みによって可能になるのか？その中で知識や情報はどのように動いているのか、そのエッセンスを見出すことが研究課題です。
2. 市民としての生活では社会全体を捉えにくい現代において、シミュレーションをはじめとする情報技術の活用は社会経済活動が抱える様々な問題を可視化する上で有用なツールです。

天野研究室は、環境情報・環境経営分野の研究を行っており、その複雑で専門的な内容を理解したり、全体像を把握するための手段として市販のデジタルゲームを用いています。これは都市づくりにおいて市民が問題を把握するための手段を社会に提供することを意図するものです。

【参考】

■プロフィール：静岡県三島市生まれ、立命館大学大学院国際関係学研究科 博士課程修了

■担当科目：環境情報論、環境経営論、日本経済論

■社会的活動：東海市環境審議会、公害防止協議会、緑化審議会、緑陽公園基本構想検討委員会委員

■主な著書・論文など

- ・ Junko Tohda, Keiji AMANO, Shunei Norikumo(2007), *Knowledge Enabling - Verification of Knowledge Creation and Enabling in the Finland Model* “Creative Futures Conference” Pori FINLAND
- ・ 天野圭二・燈田順子（2005）「「場」を動かすナレッジ・イネープリングーフィンランドの産業クラスターモデル」2006 年度組織学会年次大会報告要旨集 pp.19-24
- ・ 天野圭二（2006）「欧州共通運輸政策における自然環境情報の有効利用への課題」安斎育郎教授退職記念論集編集委員会編『平和を拓く』 pp.226-238
- ・ 天野圭二・野村淳一（2010）「デジタルゲームを活用したシリアスによる 経営学教育実践の試行」日本情報経営学会第 61 回大会予稿集 pp.51-54

石田 隆城 (いしだ たかき) 経営学部 准教授

I 専門分野

流体力学、計算理工学、空気調和工学

II キーワード

水や空気の流れ、気流シミュレーション、乱流、直接数値シミュレーション、Web、サーバーサイドプログラミング

III 研究テーマ

1. 一様等方性乱流場の統計理論
2. 授業研究 (大学教育における授業分析)

IV 研究紹介

1. たとえば、物品の貸出管理システムや、ネットワークカメラを利用した施設利用管理システムなど、ゼミの学生と Web で動作するアプリケーションを制作。
2. 授業研究。
3. 乱流場を数値シミュレーションで再現し、乱流の統計的性質を調べる。

【参考】

■プロフィール：東京都立大学理学部物理学科卒業、名古屋大学大学院工学研究科博士前期課程修了、名古屋大学博士（工学）取得。三菱電機株式会社（住環境システムエンジニアリングセンター、冷熱システム製作所）、星城大学経営学部助手・講師を経て、2011 年より星城大学経営学部准教授。

■担当科目：HP コンピューティング、ネットワーク演習 I

■社会的活動：東海市ひとつくり協議会委員

■主な著書・論文など

- ・ T. Ishida , “Lesson Study as a Model of Improving Teaching: Focus on Collegiate-Level of Education ,” Proceedings of the WALs2010 (2010), Brunei, December
- ・ P. A. Davidson, T. Ishida and Y. Kaneda ,”Linear and Angular Momentum Invariants in Homogeneous Turbulence ,” Proceedings of the IUTAM Symposium on Computational and New Perspective in Turbulence(2008), Nagoya, Japan, September, pp11-14
- ・ T. Ishida and Y. Kaneda , “Small-scale anisotropy in magneto- hydrodynamic turbulence under a strong uniform magnetic field ,” Phys. Fluid 19 , 075104 (2007)

I 専門分野

言語、キリスト教、英語

II キーワード

英語、教養教育、市民性、徳性、宗教（キリスト教）

III 研究テーマ

1. 英語素材に見られる宗教的背景の検討
2. 市民性育成という視点からの英語教育

IV 研究紹介

1. 英語素材に見られる宗教的背景の検討

グローバルな人や物の移動と共に、異なる宗教観・価値観に触れる機会も増えました。英語教育の場で使用される英語素材などにも素材作成者の宗教観・価値観が反映されています。例えば、大学教育学会第32回大会（2010年度）口頭発表その他でも言及しましたが、TOEIC®テスト問題集には、アメリカ市民宗教の徳性が反映されていると判断できます。同意するか否かに関わらず、自分とは異なる考え方に会った時に自分はどうするのか、グローバル世界の中で日本の教育はどうあるべきなのか、地域の皆様とご一緒に考える機会があれば幸いです。

2. 市民性育成という視点からの英語教育

学校・大学は学びの共同体であり、そこでは各成員が責任を果たすことが求められます。しかしながら、実際の教育現場では、クラス内、学校・大学内での強い共同体意識が常に保たれるとは限りません。健全な意味での共同体意識は健全な心から生まれます。民主国家である日本においては、そのような心とは、高い市民性であるということもできるでしょう。英語教育を通じて、どのように生徒・学生諸君の市民性を高めていくのか、具体的な方策はもちろん、精神的な次元に於いても教育に携わる皆様とご一緒に意見を分かち合いたいと思います。

【参考】

■プロフィール：愛知県名古屋生まれ、南山大学外国語学部英米学科（学士）、ダラム大学大学院（修士）、ニューカッスル大学現代言語研究科専任講師（日本語）、名古屋明德短期大学英語科助手・講師・助教授、星城大学経営学部助教授を経て、2007年から星城大学経営学部准教授。

■担当科目：英語Ⅲ・Ⅳ、総合英語Ⅰ・Ⅱ、英語討論、TOEIC 英語Ⅱ、言語文化、自分づくりゼミⅠ・Ⅱ、社会探索ゼミ

■主な著書・論文など

- ・『『心のハート』は戦争への入り口か？—『「心」と戦争』への反論—』『星城大学 人文研究論叢 Vol.8』2012年（単著）
- ・『キリスト教と天皇（制）』—メシアニック・ジューダイズムを手掛かりに—』『星城大学 人文研究論叢 Vol.7』2011年（単著）
- ・『TOEIC®テスト新公式問題集』Part3 の質的分析—徳性の視点から—』『星城大学 人文研究論叢 Vol.8』2012年（共著）
- ・『TOEIC®テスト問題集に見られる英語素材の分析—教養教育という視点から—』『星城大学 人文研究論叢 Vol.7』2011年（共著）
- ・『レフト・ビハインド』と千年期前再臨説とアメリカ保守派についての覚書』『星城大学 人文研究論叢 Vol.5』2009年（単著）

I 専門分野

英語教育、福音主義キリスト教、異文化理解

II キーワード

英語教育、教養教育、倫理的個人主義、福音主義、キリスト教

III 研究テーマ

1. 英語素材に見られる宗教的背景
2. 大学教養教育の目標に合致した英語教育

IV 研究紹介

1. 米国 The Christian Film and Television Commission および MOVIEGUIDE® 主宰者テッド・ベア (Ted Baehr) 氏推奨映画作品とその背景を検討しています。米国で成功する作品には、“アメリカの良心”ともいうべき倫理的個人主義を涵養するものがあります。倫理的個人主義は、広く民主国家において求められる善き市民すなわち“成熟した個人”に必須の資質であり、米国ではキリスト教およびキリスト教と並行して存在するアメリカ“市民宗教”の価値観と合致するものです。日本の“日本の良心”ともいうべき倫理的個人主義の存在に思いを馳せつつ取り組んでいます。
2. グローバル社会および広く民主国家において求められる市民性の育成という目的に合致した英語教育の在り方を模索しています。加藤知子准教授との共同研究として、TOEIC® テスト新公式問題集に見られる英語素材の分析をし、そこに見られる徳性に着目しています。

【参考】

■プロフィール：愛知県東海市生まれ、南山大学外国語学部英米学科（学士）、南山大学外国語センターL.L. 教務助手、米国セント・マイケルズ大学大学院（TESL 修士）、名古屋明德短期大学英語科専任助手・講師・助教授、星城大学経営学部専任助教授を経て 2007 年から星城大学経営学部准教授。他に、1984・85 年国際ロータリー財団奨学生、1993 年ウィクリフ主催 SIL (Summer Institute of Linguistics) 夏期言語学講座異文化コミュニケーション・トレーニング受講（於東京羽村市東京聖書神学舎）、1995 年 ICI(Intercultural Communication Institute) 主催 SIIC(Summer Institute for Intercultural Communication) 夏期異文化コミュニケーション講座受講（於米国オレゴン州 Pacific University）など。

■担当科目：英語Ⅲ・Ⅳ、総合英語Ⅰ・Ⅱ、TOEIC 英語Ⅲ、自分づくりゼミⅠ・Ⅱ、社会探索ゼミ

■主な著書・論文など

- ・『TOEIC® テスト新公式問題集』Part 3 の質的分析—徳性の視点から— 2012 年、星城大学『人文研究論叢』第 8 号所収、共著
- ・「教養教育という視点から見た『TOEIC® テスト新公式問題集』」2010 年、『大学教育学会第 32 回大会発表要旨集録』所収、共著
- ・「星城大学におけるオリジナル英語教材作成および使用の試み—Hiplus for Campus を利用して」2005 年、『外国語メディア教育学会(LET)第 45 回全国研究大会・総会発表要項』所収、共著
- ・「日本人短大生と『家庭』の果たす役割～異文化ホームステイ・プログラムが提示する教育的課題」 2001 年、名古屋明德短期大学『紀要』第 16 号所収、単著

I 専門分野

コーポレートファイナンス、M&A (デューディリジェンス・出口戦略策定)、内部監査

II 研究テーマ

1. 中小企業の企業価値向上への施策
2. サステナブル企業に向けた業務改革

III 研究紹介

1. 【中小企業の潜在価値の顕在化】

中小企業に存在する価値資産の多くは、それを顕在化する手段の欠如から潜在化したままです。そうした価値を評価、顕在化する具体的な方策について検討します。また、資金調達から資本政策 (ベンチャー投資資金、M&A活用の出口戦略など) まで財務面からの取り組みも検討します。

2. 【サステナブル企業にむけた業務改革】

日本には伝統的な技術や製法を有しながら拡大路線を取らず、200年以上の歴史を有する地域型企業が3,000社以上も存在します。そのビジネス・モデルは伝統という非効率性の堅守と、現代流の効率性を追及する経営手法の両立によるいわばサステナブル・モデルです。このモデルをいかにして築くか、具体的な業務フロー、管理手法について提言を行います。

上記の内容にご関心をお持ちいただきました場合は、お気軽にお問い合わせください。

【参考】

■プロフィール：大手情報通信会社にて国内外の投資関連業務に従事。経済学博士。星城大学経営学部准教授 (2010～)。

■担当科目：会計学、電子会計、管理会計、簿記。

■主な著書・論文など

- ・「会計情報を用いた持続的利益の予測可能性」京都大学経済学会モノグラフ (発行番号 200909184)
- ・「会計情報と企業価値評価モデル」-OJモデルの構造と応用可能性」中央経済社、『企業会計』Vol.61 No.3 142～148頁

I 専門分野

英語、ビジネス英語、異文化理解

II キーワード

Computer Mediated Communication、英語会話、海外留学

III 研究テーマ

1. Interaction in Language Learning Situations
2. Behavior of College Students

IV 研究紹介

1. This project took place between two groups of students. One was a group of Japanese college students, the other a class of foreign students studying English as a second language at CMMS at The University of Central Florida in America. The major goal of this project was for both groups of students to become familiar with using English as a means of communication. I wanted the students from both groups to get used to speaking in English and I wanted them to have the opportunity to develop friendships with students from other parts of the world.
2. I studied the behavior of college students upon return to Japan after a year overseas in an American institution of higher learning. Integrative motivation proves quite dominant at first and then instrumental motivation seems to be stronger as time passes.

【参考】

■プロフィール: フロリダ大学大学院英文学修士課程修了。

■担当科目: 英語、英語話術、ビジネス英語、異文化理解演習、海外ビジネスセミナー、社会探索ゼミなど。
その他授業外教育として、アメリカスタディツアー、海外留学支援、ゴルフ部顧問など。

■社会的活動: 東海市しあわせ村センター英語研究会、東海市勤労センター英語研究会、アメリカ語学研修に関する調査 (University of Central Florida、Lane Community College、University of North Carolina)、全国語学教育学会 会員、Computer Assisted Language Instruction Consortium 会員、東海市国際交流協会英語スピーチフェスティバル 審査委員長、第 35 回ライオンズインターハイスピーチコンテスト 審査・講演など。

■主な著書・論文など

- ・ English as an International Language 1995/11 月 *Bulletin of Nagoya Meitoku Junior College* 第 9 号
- ・ Difficulties of Foreign Students in U.S. Colleges 1997/3 月 *Bulletin of Nagoya Meitoku Junior College* 第 12 号
- ・ Why Our Schools Fail to Teach Students 1999/3 月 *Bulletin of Nagoya Meitoku Junior College* 第 14 号
- ・ The Role of Women in Chaucer's "The Knight's Tale" 2006/3 月 人文研究論叢 第 2 号
- ・ The Effect of Motivation on Second Language Acquisition: A Presentation of Studies 2007/3 月 人文研究論叢 第 3 号
- ・ A Short Biography of John Greenleaf Whittier 2012/3 月 人文研究論叢 第 8 号

I 専門分野

医療コミュニケーション学、感染対策学、国際看護学

II キーワード

マグネットホスピタル、医療の質、団塊の世代、人生の最期

III 研究テーマ

1. マグネットホスピタルの称号（認定）取得の必要性：文献による調査研究
2. 団塊の世代人口増加（2030年超高齢社会）の予測と課題から：人生の最期をどこで、どのように

IV 研究紹介

1. 米国の病院の質を測るツールとして、“マグネットホスピタル”の称号認定があるが、唯一その称号に値するであろうベスイスラエル病院（ボストン）が市場原理のあおりで BIDMC となった時に、その神話が崩れ看護の崩壊（＝マグネットホスピタルの崩壊）を招いた（著書 コードグリーンによる）。アメリカでの認定病院は米国内全病院のまだ少なく、米国外ではオーストラリアとニュージーランドのみ。現在、いろいろな指標で病院の質を測られているが、ドナベディアンが提唱している医療の質の三側面のうち、特に看護の視点からのベンチマークを使用しているマグネットホスピタル称号認定の内容と効果を文献より検証していく。

<マグネットホスピタル称号認定の効果>

まだほとんど文献がない。American Journal of Nursing にマグネットホスピタルの認定に対して、すこし批判的な研究（ANCC は研究とは言えないと言っている）があった。一方、日本では、医師の立場より「マグネットホスピタル」は医師の中央集中化を誘い、地域医療との格差が発生するともいわれている。

2. 最近の国民衛生の動向より、現在の日本の医療の課題と限界が見えてくる。少子高齢化で死亡数が出生数を上回り、日本の人口は減少しつつある。高度先進医療とはうらはらに、医療の需要と供給のアンバランスから高齢者は行き先を見失いつつある、いや失っているといっても過言ではない。そんななか、自分も含めて団塊の世代周辺の人たちは今をどのように生き、そして最期をどこでどのように迎えようとしているのか、またこれまでの看護経験の一つひとつの事例を分析・考察することにより地域の関わりとはなにか、また、その必要性を検証していく。

【参考】

■プロフィール：福岡県生まれ、看護師歴約 40 年、2011 年より星城大学准教授

■担当科目：医療管理学、医療情報管理学、感染対策学、社会貢献論、病院管理論、医療コミュニケーション学、メディカル・リスクマネジメント学、ヒューマンファクター論他。

■社会的活動：EPA 海外看護師候補生国家試験対策（看護学指導）

■主な著書・論文など：

- ・「よくわかるバイタルサイン A to Z－血圧測定」 2001 年 GAKKEN、単著
- ・「私の病院の感染管理」2007 年 丸石製薬発行機関誌 Circles、単著
- ・「新しい手術看護記録の紹介」2004 年 日本手術医学会、単著

I 専門分野

社会システム工学、経営工学、教育学

II キーワード

シミュレーション、ビジネスゲーム、シリアスゲーム、ゲーミフィケーション、データマイニング、OR

III 研究テーマ

1. システムシミュレーションによるビジネスプロセス改善
2. ビジネスゲームによるエグゼクティブ養成
3. シリアスゲームによる職業教育訓練

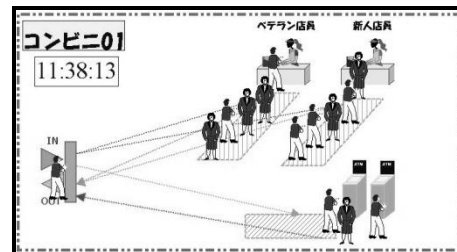
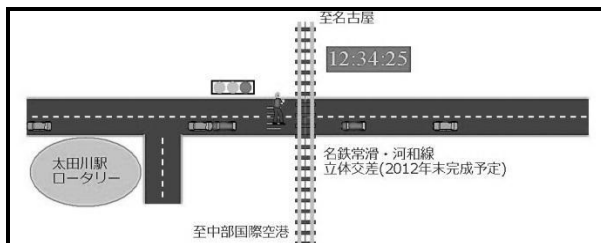
IV 研究紹介

限られた経営資源を活用して厳しい企業間競争を勝ち抜くには、いわゆる「勘・経験・どんぶり勘定」の経営手法から脱却し、科学的な事前予測に基づく経営に舵を切る必要があります。科学的な予測の手法として、統計解析と並んでポピュラーな手法、それがシミュレーションです。

シミュレーションは「**現実世界をコンピュータ上に再現し、実験を繰り返すことにより、現実問題への解決策を探る**」手法です。グローバルな競争が強いられる現在、海外企業の経営陣は、製造業・サービス業などの業種を問わず、MBA で身につけた、シミュレーションなどの科学的手法を経営にうまく取り入れています。

どの部門を強化すれば良いのか？、設備投資の効果はどうか？、配送ルートは最適か？、少ない人員で運営するにはどうしたら良いのか？など、シミュレーションを活用した予測によって、**ビジネスで想定されるほとんどすべての問題に対して、最善の意思決定**を行えます。

システムシミュレーションで将来の見通しを得たいとお考えの方は、調査・研究の協力を伺いますので、お気軽にお問い合わせください。



【参考】

■プロフィール：名古屋大学経済学部卒業、名古屋大学大学院経済学研究科博士課程（後期課程）修了、博士（経済学）取得。同大研究員（2006年4月～）、星城大学経営学部講師（2006年10月～）を経て、2011年4月から星城大学経営学部准教授。星城大学地域センター副センター長。

■担当科目：情報システム論、インターネット基礎論、生産システム論、ロジスティクス等

■社会的活動：日本情報経営学会 大会委員会委員、日本経営システム学会 評議員、日本シミュレーション&ゲーミング学会 広報委員会委員（ウェブサイト担当）、知多半島映画祭実行委員会 委員、等

■主な著書・論文など

- ・『シミュレーションーArenaを活用した総合的アプローチ（第4版）』2007年、コロナ社、翻訳
- ・「私立大学経営学部における新入学生のコンピュータ利用経験調査と情報教育」2011年、『星城大学経営学部研究紀要』Vol.11、pp.5-28、単著
- ・「デジタルゲームを活用したシリアスゲームによる経営学教育実践の試行」2010年、第61回日本情報経営学会全国大会、本学経営学部 天野圭二准教授と共同発表

I 専門分野

国際経済学、国際労働力移動

II キーワード

労働力移動、移民、外国人労働者

III 研究テーマ

1. 地域経済における外国人労働者の分析
2. 企業に必要とされるグローバル人材に関する考察

IV 研究紹介

1. 日本における外国人労働者に関する議論は、1980年代に始まりましたが、円高やバブル期における人手不足などが契機となり、日系人には門戸が開かれることになりました。1990年以降、日系ブラジル人をはじめ、南米からの労働者が東海地域の企業でも数多く就労しています。

私は、国境を越えて働く人々に関心を持ち、特に米国などへの移民を中心として人の移動に関する研究を進めてきました。近年では、日系の外国人労働者が集住する東海地域での状況に注目していますが、外国人労働者は単に労働者だけでなく生活者としての側面も持ちます。外国人労働者は地域経済にどのような影響をもたらすのか。あるいは、企業にとって外国人労働者と日本人労働者の雇用はどんな意味を持つのか。こうした問題について、学術的な側面から考察を加えることによって、現実的な問題への考え方や対応に何らかのお役に立てないかと考えています。

2. 上述1.の件に関連しますが、現在、米国をはじめ世界の国々では、単純労働に従事する外国人労働者の受け入れに消極的になる一方で、高い技術や技能を持ったいわゆる専門職労働者（頭脳労働者）を積極的に受入れる政策をとっています。高い技能を持つ労働者も、そうした国へ積極的に出向きます。日本の企業でも、海外での事業展開においてそうしたグローバル人材は欠かせない存在になってきていると言われています。そのようななかで、日本人の若者は、これから働こうというこの地域の若者は、一体どのような資質が求められているのでしょうか。そして、グローバル人材を育てるために、大学教育には何が求められているのでしょうか。実際にそうした人材を必要とする企業の方々と協同して考えていくことができれば、と考えています。

【参考】

■プロフィール：愛知県立大学外国語学部英米学科卒業、(旧)東京銀行勤務を経て名古屋大学大学院経済学研究科博士後期課程満期退学（経済学博士）、2006年より星城大学経営学部勤務

■担当科目：経済学概論、経済政策

■社会的活動：東海市特別報酬等審議会委員、フルブライト中部同窓会役員

■主な著書・論文など

- ・“A Further Analysis on the Welfare Effects of Illegal Immigration”, *Journal of Economic Integration*, Vol.18(2), June, 2003
- ・「米国移民政策から見る日本の外国人労働者問題への一考察—頭脳循環からウィンウィン循環へ」2008年、『地域学研究』第37巻第4号所収、単著
- ・『国際経済学の基礎100』2011年、創成社、共著

I 専門分野

言語学、日本語学、日本語教育

II キーワード

ことば、日本語、留学生

III 研究テーマ

1. 日本語の構造に関する研究
2. 日本語の範疇に関する研究

IV 研究紹介

「なぜ人間は言葉が使えるのか」という問題に興味を持っています。

日本で生まれ育った日本人は、知らないうちに日本語を覚えます。特に誰かから正しい日本語を学ばなくても、正しい日本語を理解します。間違った日本語を使うこともあります。外国人が間違った日本語を使った場合、それは間違っていると判断することができます。日本人は知らないうちに日本語の規則を習得しているようですが、その規則を説明することは難しいです。

同様のことが、中国で育った中国人の中国語、アメリカで育ったアメリカ人の英語にも言えます。

ほとんどの人間が①母語(一番自由に使える言語)を持っていること、②特にその母語の規則を勉強しなくても規則が使えること、③間違った使い方も混じっているような環境の中で正しい規則を短い期間で習得すること、などを考えると、人間には生まれつき「ある種の言語能力」が備わっているのではないかと考えられます。その言語能力がどのようなものなのかを知りたいと思っています。

さしあたって、日本人の頭の中にある日本語の規則を探り、これを他の言語の規則との関連づける研究をしています。私たちが自然に使っている日本語がなぜ日本語として成立しているのかを考えるのが、私の研究テーマです。

【参考】

■プロフィール：愛知県名古屋市生まれ、南山大学文学部卒業、名古屋女子大学短期大学部英語科助手、南山大学大学院外国語研究科修士課程修了（日本語教育修士）、2003年から星城大学経営学部講師、2008年から星城大学経営学部准教授

■担当科目：日本語Ⅰ、日本語Ⅱ、日本語スピーチ、日本語論文、キャリアサポートⅡ(留学生用)、異文化コミュニケーション

■社会的活動：日本言語学会会員、日本語教育学会会員、異文化コミュニケーション学会会員

■主な著書・論文など

- ・「知っている」の否定形 2005年、星城大学『人文研究論叢』第1号所収、単著
- ・「日本語の空の機能範疇」2008年、星城大学『人文研究論叢』第4号所収、単著
- ・「形容詞・形容動詞の屈折をめぐって」2010年、南山大学『南山大学日本文化学科論集』第10号所収、共著

I 専門分野

英語教育学、言語習得論、応用言語学

II キーワード

コミュニケーション、効果的な英語の授業、外国における英語教育の実態

III 研究テーマ

1. 英語の授業研究
2. 小学校「外国語活動」のあり方

IV 研究紹介

1. 外国語である英語をどのように教えれば、生徒が英語を使えるようになるのかに関する研究を行っています。中学校・高等学校では、『学習指導要領』でコミュニケーション能力を伸長するようにとされていますが、どのようなことを授業で行えばよいのかについては、現場の教師に任せられているのが現状です。具体的な言語活動を紹介し、目的を達成することのできる授業について共同研究ができる学校・先生を歓迎いたします。
2. H.23 年度より、小学校 5、6 年生で週 1 時間の「外国語活動」が必修化されています。どのような内容が適切であるのかについて、日本国内のみならず外国での現状を実地研究しています。具体的な活動やカリキュラムの作成などについて、さまざまな事例をもとに、自校にふさわしいものを開発する支援を行っています。

【参考】

■プロフィール：京都市生まれ、京都市立中学校教諭、兵庫教育大学大学院学校教育研究科言語系コース修了、名古屋明德短期大学専任講師、星城大学経営学部専任講師を経て現職。

■担当科目：英語Ⅲ・Ⅳ、総合英語Ⅰ・Ⅱ、TOEICⅠ、自分づくりゼミⅠ・Ⅱ、社会探索ゼミ

■社会的活動：全国英語教育学会、大学英語教育学会（JACET）

■主な著書・論文など

- ・『実践的コミュニケーションのための英語のタスク活動と文法指導』共著 2000 年 大修館書店.
- ・『文法項目別 英語のタスク活動とタスク 34 の実践と評価』共著 2005 年 大修館書店.
- ・『文法導入のための「フォーカス・オン・フォーム」アプローチ』共著 2011 年 大修館書店.
- ・『英語教育学体系 第 5 巻: 第二言語習得 SLA 研究と外国語教育』共著 2011 年 大修館書店.
- ・“The Effects of Focused and Unfocused Written Corrective Feedback in an English as a Foreign Language Context,” *System* 36, Rod Ellis, Mihoko Murakami, Hideyuki Takashima. pp. 353-371. 2008.

I 専門分野

マルチメディア論(景観論)、都市計画学(都市交通論)、都市・生活情報論

II キーワード

景観、都市情報、都市交通(、空地・空家)

III 研究テーマ

1. 地域 IC カード(無線 LAN から RFID まで)
2. コミュニティバス(道路網、公共交通網の計画)
3. 都市計画学(景観論・都市交通論)

IV 研究紹介

1. IC カードって、ご存知でしょうか? 近年、電子マネーとしてよく使われます。これを、地域カードとして使えないか、研究しています。もともとは、この大学の学生証としても、用いられたのですが、もうすぐ鉄道会社が新しいカードを出すと聞いています。一昨年度より、研究会を開いています。東海まちづくり研究会の兄弟分のような存在です。

私は、地域カードとして知多半島全域で非接触 IC カードによる、地域カードの実現を夢見ています。小銭の要らない、お年寄りにも優しいカード社会は、どんなものでしょうか。

2. コミュニティバスは、福祉のバスか? ワンコインのバスが最近たくさん見られます。多くは、路線バスより小さな車体で細い道に入ったりするので、一度乗るとなかなか便利なバスです。しかし、乗りたいときに来てくれず、また遠回りをします。時間に余裕のないときには乗れません。

私は、路線も大事ですが、公共交通には頻度もある程度必要ではないかと思います。そのためには、幹線公共交通との乗り継ぎが必要であると思います。

3. 全世界的に見て、自動車に乗れるくらい経済的に豊かな人が増えてきました。なんとか、燃料の奪い合いをせずに、暮らせないかと考えています。ソーラー発電、グリッド情報など。
4. 最近、空地・空家について調べだしました。これから殖えるであろう、これらについても情報をお願いします。

【参考】

■プロフィール: 京都市生まれ、京都大学工学部土木工学科卒業、京都大学大学院工学研究科修士課程修了(工学修士)、岡山大学工学部助手、岐阜聖徳学園大学助教授、2002 年から星城大学経営学部准教授

■担当科目: マルチメディア情報論、経営科学、都市情報論、生活情報論、都市計画論、都市交通論

■社会的活動: 東海市都市計画マスタープラン委員、岐阜市長良川フォーラム、日本交通政策研究会低炭素社会の交通運用研究グループ研究員

■主な著書・論文など

- ・『すぐわかる計画数学』1998 年、コロナ社、共著
- ・ユビキタス環境の街づくり 2003 年、オフィスオートメーション学会誌 単著
- ・はんだの祭と岸和田だんじり祭の比較 2009 年、星城大学経営学部『研究紀要』第 8 号所収、単著
- ・知多地域における地域 IC カード 2010 年、情報経営学会 単著

I 専門分野

スポーツマネジメント、スポーツ社会学、スポーツビジネス

II 研究テーマ

1. 地域スポーツクラブの少子・高齢化社会に及ぼす影響に関する研究
2. 競技スポーツのチームマネジメントに関する研究

III 研究紹介

1. 現代社会において少子・高齢化が叫ばれていますが、「健康」というキーワードの下、様々な取り組みがなされています。この問題解決において、運動・スポーツの役割が非常に大きいと言われています。

現在、文部科学省が推進する「総合型地域スポーツクラブ」の存在が、今後の日本のスポーツ状況を大きく変えるのではないかと考えられており、それによって日本社会が抱える諸問題にどのような影響を与えるのかを考えていきます。

2. 私は、競技スポーツの指導者として対象を大学生に現場で指導を行っております。そこでは伝統大学とは違い新設の大学ということもあり、一からのスタートです。そのため、チーム立ち上げにむけての準備、新興勢力による周囲からの協力不足などチームを運営・管理する能力が問われます。本大学の状況を事例研究として、競技スポーツのチームマネジメントに関する研究活動を行っていきます。

【参考】

■プロフィール：愛知県名古屋市生まれ、中京大学体育学部卒業、中京大学大学院体育学研究科博士課程単位取得退学（体育学修士）、2004年から星城大学経営学部講師、2010年から准教授

■担当科目：スポーツマネジメント論、生涯スポーツ論、体育・スポーツ社会学、コーチング論

■社会的活動：愛知大学野球連盟理事、日本体育学会、日本スポーツ社会学会

■主な著書・論文など

- ・「高校野球の持つ価値と問題性に関する一考察」1997年、『中京大学論叢』第38巻第2号、共著
- ・「生涯スポーツイベント参加者がもたらす大会参加総支出額の試算」1997年、『東海保健体育科学』第19巻 共著
- ・「生涯スポーツイベントにおける消費行動」1998年、『中京大学論叢』第39巻第2号、共著
- ・「大学生のスポーツ活動へのコミットメントに関する一考察」星城大学『研究紀要』第9号 単著

I 専門分野

臨床心理学、健康支援学、異文化適応

II 研究テーマ

1. 家庭、学校、職場、地域におけるメンタルヘルス
2. からだの健康とこころの健康の相関に関する研究
3. 新しい環境への適応に関する研究

III 研究紹介

1. 私は現在、学生相談室で学生のカウンセリング、教職員のためのコンサルテーション、学外専門機関との連携などに携わっていますが、大学生に限らず、乳幼児、小・中・高校生、社会人、高齢者など、さまざまな年代の方々のメンタルヘルスに興味を持ち相談活動や講演を行っています。臨床心理士としての専門知識と経験を生かし、今後は地域に根ざしたこころの健康の増進のための研究・活動を進めていきたいと思っています。
2. からだとこころは、互いに切っても切れない関係にあります。たとえば、気分が落ち込んだりイライラしている人は、からだに余計な緊張があったり痛みを感じている場合があります。また、からだの具合が悪かったり慢性の症状や痛みがある場合、こころにも大きなストレスがかかっています。自分のからだの状態に意識を向け、無駄な緊張をほぐし、自己コントロール感を高めていくこととこころの健康度との関連性について興味を持って研究しています。
3. 世界のグローバル化が進み、多くの人々が外国に出ていくようになりました。その一方で、海外から日本に入ってくる外国人も急増しています。地域では日本にしながら異文化接触・適応体験をしているということが起こっているのではないのでしょうか。これまで、異文化接触の問題は、文化人類学・社会心理学の分野で多くの研究がなされてきましたが、個々の人間のこころの中で何が起きているのか、どのようにして新しい環境に適応していくのかという問題については、まだ、それほど多くの研究がなされていません。私は、臨床心理学の立場から、異文化体験をした時にこころの中で何が起きているのか、不適応に陥った場合に、どのような支援が有効かということについて研究を行っています。

【参考】

■プロフィール：福岡県福岡市生まれ、臨床心理士 (No.16958)、西南学院大学文学部児童教育学科卒業、福岡教育大学大学院教育学研究科修士課程修了(教育学修士)、英国ダーラム大学大学院カウンセリング&ガイダンス研究科修士課程修了(カウンセリング&ガイダンス修士)、英国ダーラム大学大学院教育学研究科博士課程修了(教育学博士)、精神科病院勤務、公的機関相談員、専門学校等講師、愛知県スクールカウンセラーを経て 2009 年から星城大学経営学部特任講師、学生相談室相談員

■担当科目：心理学、臨床心理学、精神医学

■主な著書・論文など

- ・「留学生の心理的体験に関する一研究」2009 年、星城大学『人文研究論叢』第 5 号所収、単著
- ・「身体を通しての心へのアプローチ：臨床動作法についての覚書」2010 年、星城大学『人文研究論叢』第 6 号所収、単著
- ・「大学生の適応についての質的研究」2012 年、星城大学『人文研究論叢』第 8 号所収、単著

I 専門分野

現代中国語文法、中国語教育、言語学

II キーワード

中国語研究、中国語教育

III 研究テーマ

1. 現代中国語における再帰表現に関する研究
2. 現代中国語における身体部位名詞の意味拡張について（認知言語学的アプローチから）

IV 研究紹介

民間では、地域のカルチャーセンター等で中国語講座が開講されています。しかしながら、幅広い年齢層や中国語学習の経験により、習得レベルに差があるといったように、経歴の異なる方々が同時に受講しているケースが多々見られ、授業をスムーズに行えないといった問題が発生しています。

このような問題を解決するには、クラスレベルの細分化、少人数制クラスの設置、それに伴う講師の増加などが必要であると考えられます。そこで、地域との連携により、公共施設を利用した複数の教室開講、地域と密着した講師の確保や地域の方々と講師との協力に基づいた教室運営といった方法が挙げられます。

また、中国語や中国文化に興味をもつ人達が協力し合うことにより、イベント等の企画開催も行うことができ、更なる地域活性化が期待できると思われます。

中国語講座の開講や運営に関してご相談がある際には、どうぞお気軽にご連絡ください。

【参考】

■プロフィール：三重県いなべ市生まれ、名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士後期課程修了、2009 年から星城大学経営学部講師

■担当科目：中国語 I・II・III・IV、自分づくりゼミ I・II、社会探索ゼミ

■社会的活動：日本中国語学会会員、中国語教育学会会員、日中対照言語学会会員、日本言語学会

■主な著書・論文など

- ・“试论“头”的基本义和语义扩展”（訳：「頭」の基本義とその意味拡張について）2005 年、名古屋大学大学院国際言語文化研究科国際多元文化専攻『多元文化』第 5 号所収、単著
- ・「現代中国語における再帰表現に関する一考察——「V+身体部位 N」の形式を中心に」2008 年、名古屋大学大学院国際言語文化研究科国際多元文化専攻『多元文化』第 8 号所収、単著
- ・「中国語の再帰表現における他動性と客体化の関連性——「V+身体部位 N」の形式を中心に」2008 年、『星城大学人文研究論叢』第 4 号所収、単著
- ・「現代中国語における“被”構文と主題文について——「V+身体部位 N」形式の再帰表現を中心に」2009 年、『星城大学人文研究論叢』第 5 号所収、単著
- ・「現代中国語の再帰表現における受身文への適性に関する一考察——「身体部位 N+被+Na+VP」形式を中心に」2010 年、『星城大学人文研究論叢』第 6 号所収、単著
- ・「現代中国語の再帰表現における自然受身文への適性に関する一考察——「身体部位 N+VP」形式を中心に」2011 年、『星城大学人文研究論叢』第 7 号所収、単著

I 専門分野

運動生理学、水泳

II キーワード

骨代謝、メカニカルストレス、骨形成

III 研究テーマ

1. 骨を鍛える
2. 低カルシウム摂取と骨強度
3. 最大筋収縮を目的とした等尺性筋収縮の関与について

IV 研究紹介

1. 骨は、負荷（メカニカルストレス）が加わった部位にカルシウムを沈着させ、骨密度を増加させることが知られている。これまで、ラットのジャンプトレーニングにより、特に脛骨の骨肥大に大きく影響をおよぼすことを報告してきた。また、運動強度は強い方がメカニカルストレスも大きくなり、より顕著な効果を得ることができる。さらに、ジャンプの回数は10回程度でよく、それ以上の回数はより良い結果が得られるものの対数曲線に近似する結果となった。また、低強度の運動ではジャンプの回数を増加させることで骨強度が高くなる結果が得られ、ジャンプの回数と強度の相互関係が示された。
2. さらに、ラットに低カルシウム食を摂取させながらジャンプトレーニングを行わせた結果、運動群の下肢骨骨密度が顕著に増加した。この不足分のカルシウムをどこから得られたのか検討した結果、臀部の骨密度が顕著に低下していることから、臀部の骨から下肢骨へとカルシウムの置換が行われた可能性を示唆した。
3. 最大筋力を発揮するためには、等尺性筋収縮が有効であることはよく知られている。しかし、力発揮を行うまでの期間は動員される筋肉が非収縮な場合が多い。例えば、陸上や水泳のスタート時の姿勢から号砲によりスタートを切る時に、即座に強い筋収縮が行えばよりタイムを縮めることができる。そこで、非収縮時または等尺性筋収縮時から力発揮までの時間と強さを検討していこうと考えている。

【参考】

■プロフィール：兵庫県神戸市出身、中京大学体育学部卒業、中京大学大学院体育学研究科博士後期課程中退（体育学修士）、中京大学大学院体育学研究科助手、中京大学体育学部健康科学科講師、2012年より星城大学講師

■担当科目：運動・スポーツ生理学、体育実技（水泳）、スポーツ栄養学、レクリエーション実技

■社会的活動：東海シティマラソン実行委員、みよし市体育協会スポーツ指導者講習会講師、地域住民のための健康づくり運動教室1

■主な著書・論文など

- ・“Effects of low- repetition jump exercise on osteogenic response in rats.” *J Bone Miner Metab* 26(3), 2008, 共著
- ・“Bones benefits gained by jump training are preserved after detraining in young and adult rats.” *J Appl Physiol* 105(3), 2008, 共著
- ・“High-impact exercise frequency per week or day for osteogenic response in rats.” *J bone Miner Metab* 26(5), 2008, 共著
- ・“Non-uniform decay in jumping exercise-induced bone gains following 12 and 24 weeks of cessation of exercise in rats.” *J Physiol Sci* 61(6), 2011, 共著
- ・“A few separated jump training sessions three times per week increase bone strength in rats.” *Adv Exerc Sports Physiol* 16(3), 2011, 共著

I 専門分野

教育心理学

II キーワード

教師の学習、協同的な省察、授業研究

III 研究テーマ

1. 授業研究を通して教師がどのように学習するかを検討
2. 教師の実践知の検討

IV 研究紹介

1. 教師の学びについて研究しています。教師が力量を高める必要性が指摘され続けて久しいのですが、具体的にどのようにして力量を高めていくかについては議論が乏しいところでした。そこで、明治以来の伝統がある授業研究に着目しました。日本の授業研究は、2000年に入り海外からの注目を集め、アメリカをはじめ東アジアなどに急速に広まっています。国際学力テストで高い順位にいるシンガポールや香港でも授業研究を導入し、教師の学びを促す動きが活発になっています。それらの国々では、日本の授業研究を精力的に研究しています。しかし、日本の授業研究に関しては、教師の経験知に依存するところが多く、日本国内でも授業研究での教師の学びに関する実証的な研究が乏しいため、海外からの研究者が文献探しに困っています。私は、日本が先達となっている授業研究において、教師が学ぶ仕組みを理論的に解明し、国際発信していくことを行っています。
2. 教師の実践知について検討しています。優れた教師は、子どもたちの学習の様子を瞬時に捉え的確に対応することで、子どもたち同士で学び合う活動を支えています。そうした授業では、教師が一方的に話した内容を記憶する学習ではなく、子どもたちが学習内容に対し自分なりの納得を持つ学習が展開されます。記憶しただけではすぐに忘れてしまいますが、納得したことについては長く記憶に残り、現実の生活に適用できる生きた知識となります。では、そのような授業を成立させる秘密はどこにあるのでしょうか。優れた教師は、授業中に複雑な意思決定を何十回も行います。その意思決定を支える知、すなわち実践知は、体に染み付いているものなので、容易に言葉にできませんが、様々な研究手法が開発されてきました。優れた教師の実践知を解明することが、明日の教師たち、明日の教育、明日の子どもたちに役立つものと考えております。

【参考】

- プロフィール：東京都生まれ、東京大学大学院教育学研究科博士課程修了（教育学博士）、2012年より星城大学客員講師
- 担当科目：教育心理学
- 社会的活動：
- 主な著書・論文など
 - ・『実践知—エキスパートの知性—』2012年、有斐閣、共著
 - ・『授業の研究・教師の学習・レッスンスタディへのいざない』2008年、明石書店、共著
 - ・「現職教師は授業経験から如何に学ぶか」2007年、『教育心理学研究』、55巻、単著
 - ・「授業研究の事後協議会を通した小学校教師の談話と教職経験：教職経験年数と学校在籍年数の比較から」2012年、『発達心理学研究』、23巻、単著
 - ・”How teachers change their perspectives through lesson study: An analysis of teachers' narratives and reports about lesson study.”, The World Association of Lesson Studies International Conference 2011, 2011, Tokyo

リハビリテーション 学部

I 専門分野

リハビリテーション医学全般

II キーワード

障害者、血流、超音波

III 研究テーマ

1. 障害者の血流動態（静脈血流、局所血流）の研究
2. ロボットリハビリテーションの開発と実証の研究

IV 研究紹介

1. 脳卒中、脊髄損傷患者は下肢深部静脈血栓症をおこしやすく最も留意すべき合併症である。まず現状の頻度を超音波血管エコー（静脈エコー）で調べると予想以上に多く、上肢にも発生することがわかった。そこで予防法は何が合理的に良いかは、静脈還流を計測することにより客観的評価となる。一般的な弾性ストッキングは静脈還流に与える影響は全くないことも判明した。詳細は省くが、全く別な方法での予防法、すなわち静脈還流が増加する方法をみだしており、研究を進めているところである。
2. リハビリテーション治療にロボットが介入することは最近急速に行われつつある。下肢ロボットリハビリテーションは多くの報告があるが、上肢は極めて少なく、その効果のほどは不明である。岐阜大学との共同研究で脳卒中片麻痺患者に対して、上肢訓練用ロボットを開発し、実証試験を行ってきた。結果としては大きな機能改善は認められないものの、技術・コンセプトは次世代の上肢ロボットリハビリテーションの応用に寄与するものである。

【参考】

■プロフィール：宮城県生まれ、産業医科大学卒業、2008年より星城大学教授

■担当科目：リハビリテーション医学、内科学、一般臨床医学、画像診断学

■社会的活動：厚生労働省理学療法士・作業療法士国家試験委員、日本リハビリテーション医学会広報委員会委員、日本リハビリテーション医学会・中部東海地方会幹事、岐阜リハビリテーション研究会世話人、岐阜回復期リハビリセミナー顧問

■主な著書・論文など

著書

- ・「リハビリテーション医療」2007年、金芳堂、共著
- ・「地域リハビリテーション支援指導者マニュアル」2005年、岐阜県健康福祉環、共著
- ・「リハビリテーションの新展開」2001年、日本リハビリテーション病院・施設協会編、共著

論文（過去3年間）

- ・"Development of hand-assist robot with multi-degree-of-freedom for rehabilitation therapy" IEEE/ASME transactions on mechatronics, Vol99, 2010
- ・"A hand rehabilitation support system with improvements based on clinical practices." Proc. of international Federation of Automatic Control, 2009
- ・"拇指対向運動を支援するハンドリハビリ支援ロボットの設計と動作評価" 日本機械学会論文集、第74巻, 2008
- ・"手指上肢リハビリ支援システムの概要と今後の事業展開" ロボット 185巻, 2008
- ・"Development of virtual reality exercise of hand motion assist robot for rehabilitation therapy by patient self-motion control" Proc. of 30th Annual International IEEE EMBS Conference, 2008
- ・"頸髄損傷四肢麻痺患者に発症した上肢深部静脈血栓症" 日本脊髄障害医学雑誌 第21巻, 2008

I 専門分野

リハビリテーション医学、理学療法学

II キーワード

運動療法、脳血管障害、運動器障害、健康支援

III 研究テーマ

1. 脳血管障害者に対する運動療法とリスク管理
2. 社会保障制度と医療提供体制、リハビリテーションの関係

IV 研究紹介

1. 脳血管障害は、わが国の最も高い有病率疾患であり、その大半はリハビリテーションの対象となる。脳血管障害は、高血圧・糖尿病・心疾患などの基礎疾患を背景に発生する循環器疾患であり、同時にその発生部位が脳であることから中枢神経疾患、さらにその症状の一つに左右いずれかの片麻痺を生じる運動器疾患であるという複合的疾患の特徴を有している。そのリハビリテーション・運動療法の実施に際しては、循環器疾患の特徴に配慮したリスク管理の下に行う必要があるものの、脳血管障害者の起立負荷や運動負荷時の循環動態は必ずしも明らかではなかった。そのため、脳血管障害者の起立時循環応答を観察し、健常高齢者・若年者と比較検討し、積極的に起立・歩行動作を行うことが重要であることを示した。
2. 日本の医療は、世界に類を見ない国民皆保険制度を昭和 36(1961)年に達成して、世界一の長寿国となった。しかし、近年の超高齢社会の到来と医療技術の発展から、疾病構造の重症化と自立生活の障害を招来することとなり、特に生活障害への対策として介護保険制度(2000 年)も創設された。生活障害を来す原因疾患の第一位は脳血管障害であり、その片麻痺という運動器疾患としての側面が影響を及ぼす。さらに、運動器官の障害は自立生活を困難にするだけでなく、自ら運動する機会を喪失することで二次的障害(廃用症候群)も惹起させることとなる。これらのことを、慢性期重症片麻痺例の基本動作能力検査から実証的検証を行い、その結果から運動療法のあり方、およびリハビリテーションの社会的責務を示した。

【参考】

■プロフィール：福岡県北九州市生まれ、九州リハビリテーション大学校理学療法学科卒業、弘前大学大学院医学研究科修了、2003 年より星城大学教授

■担当科目：神経筋障害理学療法学、理学療法学研究法、運動器障害系リハビリテーション学

■社会的活動：日本理学療法学会大会査読員、全国大学理学療法教育研究会評議員、社会福祉法人さつき福祉会評議員

■主な著書・論文など

- ・「基本動作練習のコツ ―片麻痺者の移乗動作と運動療法のコツ―」理学療法ジャーナル,44(1)2010 年, 単著
- ・「中枢神経障害理学療法学テキスト」2008 年、南江堂、編集
- ・”Initial Drop of Blood Pressure during Head-up Tilt in patients with Cerebrovascular Accidents.” Environmental Health and Preventive Medicine 9(5) 2004, 共著
- ・「老人保健施設入所者における骨量・運動機能と痴呆・徘徊の関連について」総合リハビリテーション, 33(2) 2005, 共著

大川 裕行 (おおかわ ひろゆき) リハビリテーション学部 教授

I 専門分野

理学療法学、健康支援学

II 研究テーマ

1. 障害者のスポーツ (健康支援)
2. 理学療法士教育

III 研究紹介

1. 1981 年以降、障害者の健康支援の観点から、受傷から退院までの理学療法、および社会復帰後は障害者のスポーツをテーマに研究を継続している。特に、脊髄損傷者の運動生理、運動パフォーマンスの改善、健康の維持・増進に取り組んでいる。
2. 2002 年以降は、上記に加え、理学療法士の教育、特に卒前教育としての臨床実習、卒後教育としての新人教育に力を入れ取り組んでいる。

【参考】

■プロフィール：九州リハビリテーション大学校理学療法学科卒、理学療法士、産業医科大学病院リハビリテーション部勤務、佛教大学社会学部社会福祉学科卒業、社会福祉士、経営学修士（九州産業大学）、医学博士（産業医科大学）、2002 年から星城大学リハビリテーション学部教授

■担当科目：リハビリテーション概論、理学療法学概論、運動療法学、義肢装具学、他

■社会的活動：社団法人日本理学療法士協会教育部部員、日本義肢装具学会会員、日本災害医学会会員、日本体力医学会会員、日本脊髄損傷医学会会員、日本臨床スポーツ医学会会員、愛知県理学療法士会会員、日本障害者スポーツ学会常任理事、日本リハビリテーション推進研究会理事

■主な著書・論文など

- ・「臨床で学ぶことの意味」2010 年、『実践理学療法スキル』所収、医歯薬出版、単著
- ・『運動療法学テキスト』2010 年、南江堂、共編著
- ・Longitudinal Changes in Physical Capacity Over 20 Years in Athlete With Spinal Cord Injury. *Arch Phys Med Rehabil* Vol.91, 2010, 共著
- ・「脊髄損傷者の生活習慣病予防におけるスポーツの効果」日本障害者スポーツ学会誌 18、2010、共著

I 専門分野

脳神経科学、神経解剖学

II キーワード

咀嚼（噛むこと）、ストレス、認知機能、骨粗鬆症

III 研究テーマ

1. 噛むことによるストレス緩和機構の解明
2. 噛むことによる脳賦活機構の解明
3. 歯の喪失が全身に及ぼす影響の解明
4. 咬合不全（噛み合わせが悪いこと）が脳機能に及ぼす影響の解明

IV 研究紹介

1. 噛むことによるストレス緩和機構の解明

現在社会は昔に比べて格段に便利になりましたが、その分多種多様なストレスにさらされるようになりました。ストレスは小さくても慢性化すると精神疾患など様々な病気を引き起こします。最近、我々の研究から、噛むこと（チューイング）でストレスが緩和されることがわかってきました。チューイングという極めて簡単な方法でストレスが緩和されるという研究成果は、現在のようなストレス社会において朗報といえます。

2. 噛むことによる脳賦活機構の解明

我が国は高齢社会に突入し、認知症を発症する高齢者が急増しています。有意義な老後を過ごすために認知症予防が不可欠な課題となっています。我々の研究から、噛むことにより脳の活性が高まることがわかってきました。高齢社会における認知症予防や脳リハビリに噛むことを応用しようと考えています。

3. 歯の喪失が全身に及ぼす影響の解明

歳を重ねるにつれ歯の数が少なくなり、うまく噛めない方が増えています。最近の我々の研究から、歯の喪失が認知機能障害や骨粗鬆症を悪化させることがわかってきました。自分の歯で楽しみながら食事をする事の大切さを社会に広めたいと考えています。

4. 咬合不全（噛み合わせが悪いこと）が脳機能に及ぼす影響の解明

噛み合わせが悪い状態が長く続くと、頭痛や頸部の疼痛などの不定愁訴が引き起こされるといわれています。最近の研究により、咬合不全により、脳機能が障害されることがわかってきました。「噛み合わせ」の重要性を社会に説いていきたいと考えています。

【参考】

■プロフィール：和歌山県生まれ、朝日大学歯学部卒業、歯科医師、岐阜大学大学院医学研究科修了（医学博士）、2009年より星城大学教授

■担当科目：解剖学、解剖学実習

■社会的活動：元岐阜市保健医療審議会委員、日本解剖学会評議員、SAM 研究協議会評議員

■主な著書・論文など

- ・噛むチカラでストレスに勝つ、健康と良い友だち社、共著
- ・Occlusion and brain function: mastication as a prevention of cognitive dysfunction. J Oral Rehabilitation, 2010 年, 共著
- ・Gender-related changes in three-dimensional microstructure of trabecular bone at the human proximal tibia with aging, Histol Histopathol, 2011 年, 共著
- ・Effect of bite-raised condition on the hippocampal cholinergic system of aged SAMP8 mice. Neurosci Lett., 2012, 共著

I 専門分野

精神障害者地域生活支援、精神科作業療法、障害者スポーツ、就労支援

II キーワード

精神障害、作業療法、障害者スポーツ、就労支援

III 研究テーマ

1. 精神障害者の地域生活に関する研究
2. 精神障害者スポーツに関する研究

IV 研究紹介

1. ここ数年、精神障害者は毎年約 10 万人ずつ増えて 300 万人を超えています。また、平成 22 年に行われた「こころの健康政策構想会議」では健康・生活被害指標（障害調整生命年 DALY）を用い、精神疾患を 3 大疾患の 1 つとしました。精神障害者の地域生活支援は、重要な課題であり、就労・家族支援を含めた地域での生活支援に取り組んでいます。
2. スポーツと健康は、密接な関係があります。精神障害者スポーツの中心が、入院患者から地域生活者になり、バレーボール、フットサルが地域で行われるようになりました。今後、さらに地域で生き生きと精神に障害がある方と一緒にスポーツを行い、普及、啓発、研究にも取り組んでいきたいと考えています。

【参考】

■プロフィール：佐賀県鳥栖市出身、神戸大学医療技術短期大学部卒業、神戸大学大学院医学系研究科博士課程修了（保健学博士）、大村病院、いぬお病院、第一医療リハビリテーション専門学校、健康科学大学、2011 年より星城大学リハビリテーション学部教授、作業療法士・精神保健福祉士教育・研究と共に、臨床・地域で精神に障害がある方と関わり、お互いに成長していきたいと模索している。

■担当科目：精神障害作業療法学Ⅰ、Ⅱ、精神障害作業療法学実習など

■所属学会：日本作業療法士協会、日本精神保健福祉士協会、日本デイケア学会、日本職業リハビリテーション学会、日本精神障害リハビリテーション学会、日本スポーツ精神医学会など

■社会的活動：日本作業療法士協会理事、日本デイケア学会理事、九州地区精神障害スポーツ推進連絡協議会代表世話人、精神保健従事者懇談会幹事、第 5,6,7,8,9,11,12 回全国障害者スポーツ大会九州・沖縄ブロック代表監督(精神障害)など

■主な著書・論文など

- ・図解作業療法技術ガイド（文光堂）共著
- ・作業療法のとらえかた（文光堂）共著
- ・Kazuya Sakai, Takeshi Hashimoto, Sadafumi Inuo ; Factors Associated with Work Outcome among Individuals with Schizophrenia : Investigating Work Support in Japan . WORK32(2). 2009
- ・坂井一也, 杉村直哉：精神科早期退院促進プログラムの開発と作業療法の実践 初回入院・早期退院事例. 作業療法 27(5).2008
- ・坂井一也, 春山佳代, 山下佐織, 杉村直哉：統合失調症に対するデイケアにおける就労支援プログラム－5 年間の追跡調査－. 健康科学大学紀要 7. 2011
- ・坂井一也：スポーツを通してのノーマライゼーション～精神障害者からアスリートへ～. 戸山サンライズ. 2009

I 専門分野

高齢者健康支援学、認知症予防、老年期作業療法学、社会疫学

II キーワード

介護予防、認知症予防、高齢者健康支援、作業療法

III 研究テーマ

1. 心理社会面に着目した高齢者のための包括的支援に関する研究
2. 憩いのサロンを活用した介護予防・認知症予防に向けた介入研究
3. 心理社会面に着目した予防的社会福祉に向けた縦断研究

IV 研究紹介

1. 愛知県武豊町で自治体との共同研究として、心理社会面に着目した介護予防・認知症予防のための「憩いのサロン」事業を活用した介入研究に取り組んでいる。
2. 全国 25 自治体 10 万人の高齢者調査とその後の追跡から認知症を伴う要介護認定発生の心理社会的危険因子の解明に取り組んでいる。

【参考】

■プロフィール：広島県出身、1978 年日本福祉大学社会福祉学部卒業、1982 年国立療養所東名古屋病院附属リハビリテーション学院卒業、1982 年から名古屋市厚生院、有馬温泉病院などで勤務、その後 2003 年茨城県立医療大学保健医療学部助教授、2005 年星城大学リハビリテーション学部教授、博士（社会福祉学）

■担当科目：作業療法学特論（認知症）老年期作業療法学、作業療法学概論など

■所属学会：日本作業療法士協会、日本公衆衛生学会、日本老年精神医学会、日本認知症ケア学会、日本老年社会科学会など

■社会的活動：日本認知症ケア学会理事、日本老年精神医学会多職種協働推進委員会委員、日本作業療法士協会教育部養成教育委員会委員

■主な著書・論文など

- 1) Health Inequalities in Japan : An Empirical Study of the Older People. Trans Pacific Press, Melbourne. 分担執筆, 2010.
- 2) 「認知症の作業療法」医歯薬出版, 編著, 2009.
- 3) 「検証健康格差社会 介護予防に向けた社会疫学的大規模調査」, 医学書院, 分担執筆, 2007.
- 4) 「認知症ケアの実際Ⅱ各論」ワールドプランニング, 分担執筆, 2004.
- 5) 竹田徳則, 他：地域在住高齢者における認知症を伴う要介護認定の心理社会的危険因子—AGES プロジェクト 3 年間のコホート研究. 日本公衆衛生雑誌 57 : 1054-1065, 2010.
- 6) 竹田徳則, 近藤克則, 平井寛：心理社会面に着目した認知症予防のための介入研究—ポピュレーション戦略に基づく介入プログラム理論と中間アウトカム評価—. 作業療法 28 : 178-186, 2009. (査読有)
- 7) 竹田徳則：ポピュレーション戦略による認知症予防. 認知症ケア事例ジャーナル 1 : 437-444, 2009.
- 8) 竹田徳則：介護予防, 認知症. 作業療法ジャーナル 42 : 665-669, 2008.

I 専門分野

辺境文化、比較文化、芸術一般

II 研究テーマ

1. 戦争や災害で破壊された文化財の修復
2. 地域におけるコミュニティの役割について

III 研究紹介

1. かつて日本では、地縁・血縁といった「同族意識」の中に人々の暮らしが包括されていました。しかし個人主義の風潮が極度に成熟した現代社会に於いて、日常生活は、それ自体が独立性を有し、他者からの干渉を極度に嫌うものへと変質を遂げてきました。それは、人間としての自由を十分に獲得した一方で、思いやり・いたわりあいといった原初的な感性を、時代の激流の中に置き忘れてしまった感があります。様々な理由で他者との関係を断ち切った若者、病の身を一人暮らしの床に横たえる老人、そして、やがて訪れる孤独な死——日々の暮らしの中で失われた“人間らしい生活”を取り戻すために、いま我々が所属するコミュニティは如何なる「人間の環」を構築すべきか、を考えます。
2. 毎年秋、大学祭「星祭」に東海市、同教育委員会、中日新聞社等の後援を得、小生がコーディネーターを務めシンポジウムを開催しています。パネリストには女優の島田陽子さん、真理アンヌさん、精神神経科医の野田正彰さん、福祉ジャーナリストの横田一さん、外国人タレント事務所社長の稲川素子さん、それにプロレスラー大仁田厚さんら友人知己が殆どノーギャラで駆けつけ、地元東海市の方々も加わり、「無縁社会に求められるコミュニティの絆」などハードなテーマで丁々発止と論戦を展開しています。本12年度は映画監督の近藤明男さんらを迎え、「人間 その未知なるもの」と題して言葉のバトルを繰り広げ、そのあと同監督の最新作「エクレール お菓子放浪記」の上映を予定しています。

【参考】

■プロフィール：東京都大田区生まれ、早稲田大学教育学部卒業、同・大学院文学研究科（西洋史学専攻）修士課程修了（文学修士）。その間、ブルガリア国立ソフィア大学留学。早稲田大学文学部副手、東海大学講師・助教授を経て現職。ベースボール・マガジン社ライター、美術評論家、音楽評論家。テレビ・ラジオ・新聞・雑誌など、多彩な分野で独自の文化論を展開。2007年から現職。

■担当科目：政治学、社会学、日本文化論、芸術論、キャリアサポート等

■社会的活動：国際交流基金の助成事業として、ラトヴィア・リトアニア・グルジア・ウクライナ・デンマーク・オーストリア・ドイツなどで、映画上映（日本大使館）、コンサート（音楽大学）、文化講演会（大学）などによる「日本文化週間」を主宰。外務省関連団体の留学生選考委員。科学技術庁委託「アジアにおける原子力安全調査」団員など。

■主な著書・論文など

（単著）・『ヨーロッパ辺境紀行』1993年、恒文社 ・『学生野球の首領 島岡吉郎』1979年、（同）

（共著）・『日米安保と沖縄問題』1997年 社会評論社、

・『オーストリア 統合その夢と現実』2001年、東海大学出版会

・『ドラッグ：新しい脅威と人間の安全保障』2003年、東海大学出版会

・『日露オーラルヒストリー はざままで生きた証言』2007年、彩流社

I 専門分野

哲学、倫理学

II 研究テーマ

1. 私たちの高齢者観の倫理的問題
2. 高齢者の孤立や孤独をどうやわらげるか
3. コーポラティブ方式の可能性

III 研究紹介

1. わが国ではまもなく高齢人口が総人口の 4 割を占める超高齢社会を迎えます。世帯の構成も変化し、高齢者のいる世帯では 3 世代同居よりも高齢者夫婦のみの世帯の方が多くなり、独居高齢者も増加の一途をたどっています。コミュニティの再生など高齢期の孤独や孤立に社会的に対応することが求められています。

私は、1995 年に春日井市に建設されたコーポラティブハウス「木附の里」に住人の一人として参加しました。コーポラティブ住宅とは、住まいを必要としている人たちが集まり、協力して土地を確保し、全体設計と個別設計を行い、工事を発注して建設される集合住宅のことです。住み手が計画の当初から参画するこの建設方式のうちに良好な近隣関係を形成する秘密があります。

住宅を建設するかどうかは別にしても、コーポラティブ方式には超高齢社会の孤独や孤立を解消するヒントが含まれています。学習会などがあれば参加したいと考えていますので、気軽に声をかけてください。

2. 私の祖母は、百歳を過ぎて「寝たきり」になり、101 歳でリハビリを受けて「寝たきり」から脱け出しました。超高齢の「寝たきり」患者であっても十分なケアとリハビリを施せば「寝たきり」から脱け出し、その生活の質を豊かなものにできるのです。家族も目をみはるような生活の変化でした。祖母以外にも「寝たきり」から脱け出せる高齢者はたくさんおられると思います。

祖母が人間らしい暮らしを取り戻していく過程を写真に撮り、スライドにしました。機会があれば、ぜひ見ていただきたいと存じます。

【参考】

■プロフィール：名古屋市生まれ、京都大学文学部卒業、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学（文学修士）、鹿屋体育大学講師、名古屋明德短期大学助教授を経て、2002 年から星城大学リハビリテーション学部教授

■担当科目：哲学、倫理学、文化教養ゼミ、ボランティア演習

■社会的活動：東海市個人情報保護審査会委員

■主な著書・論文など

- ・『百歳を過ぎても「寝たきり」から脱け出せる』2009 年、一粒社、単著
- ・「集合住宅の建替えと高齢者の居住の安定」2006 年、星城大学『人文研究論叢』第 2 号、単著
- ・『心と認識－実在論的パースペクティブ－』1997 年、昭和堂、共著
- ・「コーポラティブ住宅の試みと人間の共同性」1996 年、名古屋明德短期大学『紀要』第 11 号、単著

I 専門分野

応用言語学、教材開発、翻訳論

II 研究テーマ

1. 英語教材開発研究
2. コンピューター教材開発

III 研究紹介

私の研究は教授法で、教材についていろいろ研究している。例えば、同じ材料（新聞の記事や会話）をいじることで初級・中級・上級の教材を作ることができる。特に英語力が低い人のための教材を考え、新しい練習方法を作っている。作ったものを試し、それから学生の反応や教材の効果というフィードバックをもとに改善していく。このように、学生を教材に合わせるのではなく、教材を学生に合わせるわけである。

【参考】

■プロフィール：アメリカ生まれ、テンプル大学大学院教育学研究科博士課程修了（教育学博士）、2002 年から星城大学リハビリテーション学部教授

■担当科目：英語 I、英語 II、総合英語 I、総合英語 II、ビジネス英語 I

■社会的活動：全国外国語教育学会[JALT]教材作成支部・会計担当者、JALT の内部監査の一人

■主な著書・論文など

1998 *The Effect of Learning Nouns in Lexical Sets*. Dissertation submitted in partial fulfillment for the degree of Doctor of Education, Graduate Division, Department of Curriculum, Instruction and Technology in Education.

2002 *The Changing Face of CALL: Emerging Technologies, Emerging Pedagogies*. Proceedings of the 6th Annual JALT CALL Conference, Kanto Gakuen University.

2006 Logic Puzzles for Fun and Review. *JALT Applied Materials CD-ROM*: 59-62.

2006 Single-page, multiple-view Web pages for reading ease. *The JALT CALL Journal*, 2(3), 53-61.

1995 Considerations for expanding a computer laboratory. *Bulletin of Nagoya Meitoku Junior College* #9. 111-132.

1994 The reading process as indicated by lexical inferencing. *Bulletin of Nagoya Meitoku Junior College* #6. 27-48.

I 専門分野

理学療法学・健康支援学

II キーワード

日常生活行動・健康支援・高齢者・転倒予防

III 研究テーマ

- ①日常生活行動と健康支援
- ②高齢者の転倒予防

IV 研究紹介

- ①「日常生活行動と健康支援」をテーマに研究活動を行っています。現在、病院・施設に入院・入所または外来受診されている要支援・要介護高齢者の方を対象に、日々の生活行動を身体活動量の観点から分析し、健康の維持・増進を図るための方策について検討しています。
- ②「高齢者の転倒予防」をテーマに研究活動を行っています。昨今、実際の動作に近い感覚でスポーツを体験できるゲームが脚光を浴びています。そこで、ゲームによる運動効果を検証し、高齢者の転倒予防を目的としたトレーニングメニューについて取り組んでいます。

【参考】

■プロフィール：愛知県生まれ、理学療法士、博士（医学）

■担当科目：日常生活活動学・地域理学療法学セミナー など

■社会的活動：日本理学療法士協会、愛知県理学療法士会、理学療法科学学会、専門リハビリテーション研究会、シニアフィットネスリハビリテーション研究会などの会員

■主な著書・論文など

- ・『ゲームが高齢者の身体バランス機能に与える影響』健康レクリエーション研究会雑誌 2012. 共著
- ・『健常高齢者のゲームによる身体バランス機能における効果の検証』専門リハビリテーション 2010. 共著
- ・『転倒予防・介護予防のための運動器機能向上トレーニングマニュアル』大伸社 2008年. 共著
- ・『要支援・要介護高齢者における低負荷筋力トレーニング実施2年間の効果』健康レクリエーション 2008. 共著
- ・『State-Dependent Bidirectional Modification of Somatic Inhibition in Neocortical Pyramidal Cells』Neuron 2008. 共著
- ・『Involvement of T-type Ca^{2+} channels in the potentiation of synaptic and visual responses during the critical period in rat visual cortex』EJN 2008. 共著

ジョージ・サワ (George Sawa) リハビリテーション学部 准教授

I 専門分野

English

II 研究テーマ

1. Listening comprehension, second language acquisition

III 研究紹介

I want to know how students learn English and how to teach them

【参考】

■プロフィール: Birthplace Hawaii, USA、University of Hawaii Bachelor of Business Administration、
Graduate School, University of Hawaii Master of Arts, English as a Second Language

■担当科目: English conversation; wajitsu English story-telling and narration; English debate

■社会的活動: I am the chief judge at two English speech contests (in Ogaki City and Agui City). I also attend the Tokai City International Group's parties with Japanese and foreign members.

■主な著書・論文など

Judging English Speech Contests; Journal of Liberal Arts, Seijoh University. Number 7. March 2011.

I 専門分野

西洋史 (ロシア中世史)

II 研究テーマ

1. 15 世紀末期のモスクワ大公イヴァン 3 世による統一国家形成について。
2. 修道院長ヨーシフ・ヴォロツキーの修道思想。
3. ロシアのシベリア進出史。

III 研究紹介

1. 15 世紀末期のロシアではこれまでの封建的な分領国家に代わり、近代的な統一国家が出現する。これは他のヨーロッパ諸国 (イギリスやフランスなど) における近代国家の誕生と期を一にする。その中心となったのはモスクワ大公イヴァン 3 世であった。彼はこれまでの封建的な分領国家を次々と併合し、そこに近代的な統治システムを導入し、統一国家を建設していく。その際、ロシア教会との協力なしではこの大事業はなしえず、教会行政が重要になってくる。国家と教会の関係を中心にして研究を続けてきた。
2. 当時の教会を代表する思想家で修道院長であったヨーシフ・ヴォロツキーの研究を通し、国家と教会の関係を考えることが重要である。
3. 自分にとっては比較的新しいテーマである。古くからロシア人は高価な毛皮を求めてシベリアに進出しようとしていた。しかし、モンゴル人をはじめとする他民族が建設した国家の影響で国家規模の進出はなかなか困難であった。モスクワ大公イヴァン 4 世の時代に入りモンゴル人の建設したカザン汗国を併合したのをきっかけに本格的なシベリア進出が始まる。その手段はオストローク (砦) を建設し、そこを拠点として東へ東へと進行していくというものであった。

【参考】

■プロフィール：和歌山県生まれ、現在千葉市在住、慶応義塾大学文学部卒業、同大学大学院文学研究科博士課程満期退学、平成 5 年より名古屋明德短期大学、平成 15 年より星城大学勤務。

■担当科目：歴史学、西洋文化論など

■社会的活動：「日本とロシアの友好と親善を進める愛知の会」理事

■主な著書・論文など

『スラヴ世界とその周辺』 1993 年、ナウーカ 共著

『ヨーロッパ世界と旅』 1997 年、法政大学出版局 共著

『続ヨーロッパ世界と旅』 2001 年 法政大学出版局 共著

『東シベリアの歴史と文化』 2005 年 成文堂 共著

I 専門分野

理学療法学

II キーワード

末梢循環障害、糖尿病足病変、足病変予防、過熱水蒸気

III 研究テーマ

1. 個人研究

足病変を有する症例の足底ストレス測定方法に関する検討

2. 共同研究

過熱水蒸気発生装置を用いた全身浴装置の開発

足病変予防にむけた力学的負荷量軽減方策に関する検討

IV 研究紹介

1. 足病変を有する症例の足底ストレス測定方法に関する検討

足部の潰瘍再発は、下肢切断リスクを高め、要介護状態に陥る原因となる。潰瘍の再発は足部の力学的負荷量の増加が原因となることが指摘されているが、これまで再発予防に向けた具体的な数値目標は提示されていなかった。

そこで、今年度は数値目標提示にむけた足底ストレス測定器の開発に着手し、観察研究によって力学的負荷軽減目標値の調査を行う。次年度以降は、共同研究により、目標値遵守に向けた介入方策を考案し、有用性の検証を予定である。

2. 過熱水蒸気発生装置を用いた全身浴装置の開発

介護現場では「入浴介助」が最も負担が大きい業務に位置づけられており、在宅・施設ともに介護職員の腰痛発症原因の1位は「入浴介助」であることが報告されている。しかし、入浴介助量軽減にむけた実用的な装置や代替方策の開発は進んでいない。

そこで、今年度は、入浴介助にまつわる問題や介護実施者のニーズを正確かつ詳細に把握するための実態調査を行う。調査結果を踏まえ、在宅および施設における介護負担を直接的に軽減する方策を提案し、次年度以降、新しい代替入浴方策の開発を進める予定である。

【参考】

■プロフィール：愛知県名古屋市生まれ。最終学歴 名古屋大学大学院医学系研究科博士課程修了。

名古屋大学医療技術短期大学部 卒業後、名古屋共立病院、名古屋大学医学部保健学科(理学療法学専攻 助教)を経て2012年4月より現職。

■担当科目：【前期】

内部障害理学療法学 (3年生)

理学療法評価診断学Ⅰ (2年生)

評価診断学演習 (3年生)

【通年・集中】

臨床実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

【後期】

内部障害理学療法学実習 (3年生)

理学療法技術演習Ⅱ (3年生)

情報処理演習Ⅱ (1年生)

■社会的活動：日本理学療法士学会 第48回学術大会 財務部長、日本看護医療学会 査読委員、日本フットケア学会 岐阜セミナー 実行委員

■主な著書

・林 久恵 (山崎裕司 他編)，動脈系末梢循環障害. 改訂第2版, 南江堂, 203-118, 2012

・林 久恵 (上村哲司 編)，リハビリテーションの知識. 足病変ケアマニュアル. 学研メディカル秀潤社, 104-109, 2010

・林 久恵, 熊田 佳孝 (阿岸鉄三 編)，足浴・フットケア. 維持透析患者の補完代替医療ガイド. 医歯薬出版株式会社, 171-180, 2010

I 専門分野

日常生活活動学、健康支援学、高次脳機能障害治療学

II キーワード

認知症予防、日常生活活動、高次脳機能障害、評価

III 研究テーマ

1. 認知症予防のための認知評価および生活評価方法の検討
2. アルツハイマー型認知症者の日常生活活動が、重症度によってどのように異なるのか

IV 研究紹介

1. 我が国では、急速に高齢化が進行し、認知症および認知症前駆段階である軽度認知障害者が増加しています。現在、認知症予防事業が地域在住高齢者を対象に進められています。私は、東海市の介護予防事業における認知症予防と閉じこもり予防を目的とした「いきいき元気教室」において、参加者の認知面と生活面の維持を目的に取り組んでいます。
2. 認知症において最も比率の高いものはアルツハイマー型認知症です。アルツハイマー型認知症者に対する生活活動が、症状進行とともにどのように変化するのかについては、未だ検討が不十分です。現在、私は、アルツハイマー型認知症者の日常生活活動が、重症度によってどのように異なるのか調べています。このことを明らかにすることによって、アルツハイマー型認知症者の生活援助に寄与するものと考えています。

【参考】

■プロフィール：三重県いなべ市生まれ、国立療養所東名古屋病院附属リハビリテーション学院作業療法学科卒業、金沢大学大学院医学系研究科博士課程修了（保健学博士）、2006 年から星城大学リハビリテーション学部勤務

■担当科目：高次脳機能障害作業療法学、日常生活活動学、生活支援機器演習、基礎作業学

■社会的活動：東海市いきいき元気教室講師、愛知県学術部員、日本作業療法協会事例検討委員

■主要著書・論文など

- ・Takashi Fujita, Masako Notoya, Nobuyuki Sunahara, et. al : Development and review of the validity of an “instrumental activities of daily living test” (IADL test) performed as a desk evaluation of patients with Alzheimer’s type of dementia, Journal of the Tsuruma Health Science Society : 1-13, 2010.
- ・藤田高史, 二木淑子, 高橋美幸, 杉本まみ, 能登谷晶子：軽度アルツハイマー病者に対する遂行機能評価としての片づけ検査の妥当性, 作業療法 28 : 396-409, 2009.

I 専門分野

運動学、電気生理学、心身健康科学

II キーワード

運動器系障害、運動分析、心身相関

III 研究テーマ

1. 腰部機能（慢性腰痛のメカニズム）分析
2. 膝関節機能分析
3. ミラーボックスによる治療効果の検証

IV 研究紹介

1. 人類が4足歩行から2足歩行へ移行した際に、身体構造は4足歩行のままでした。そのため、腰痛という特異的な疾患が生まれました。アメリカでは、腰痛による社会的損失（腰痛による欠勤など）が大きな問題にもなっています。私は腰痛のメカニズムを、表面筋電計という機器を用いて分析する研究を行い、腰痛患者に特徴的な身体機能の変化を報告しています。
2. 膝関節は、高齢者だけでなく若年者においても障害されることが多い関節です。それ故、多くの年代において機能異常を発見することは、障害予防につながる近道であると言えます。私はこれまでに、若年健常者の膝関節機能分析を行い、その有効な指標を報告しています。
3. ミラーボックスは1996年に、インドの学者によって報告された鏡を用いた身体機能回復の治療法です。麻痺や痛みの改善に効果があるとされていますが、どのようなメカニズムによってその改善が起こるかは明らかにされていません。私はこれまでに、ミラーボックスを用いて図形描画を行った際に、被治療側に起こる筋機能の変化を測定し報告しています。

【参考】

■プロフィール：岐阜県海津市生まれ、国立療養所箱根病院付属リハビリテーション学院 理学療法学科卒業、人間総合科学大学大学院 心身健康科学研究科博士後期課程修了（心身健康科学博士）、2007年から星城大学勤務

■担当科目：運動学Ⅰ・Ⅱ、運動学実習、臨床運動学、理学療法研究法など

■社会的活動：日本理学療法協会、日本理学療法連盟、愛知県理学療法士会、日本臨床神経生理学会、日本心身健康科学会、シニアフィットネス研究会などの会員

■主な著書・論文など

- ・「学生のための物理療法学」 2004年、大学教育出版 共著
- ・「転倒予防・介護予防のための運動器機能向上トレーニングマニュアル」 2008年、大伸社 共著
- ・「理学療法ゴールドマスターテキスト第2巻 運動療法学」 2010年、メジカルビュー 共著
- ・肩関節内転運動時の三角筋筋活動の表面筋電図学的分析—三角筋前部線維の活動に着目して— 2007年 心身健康科学 単著
- ・Mirror Box中の利き手の円描画動作が、非利き手に誘発する筋活動について 2010年 心身健康科学 共著

I 専門分野

文化人類学、歴史学

II 研究テーマ

1. 東海市の万歳
2. 「郊外都市」としての東海市の町づくり
3. 東海市の若者

III 研究紹介

以前石川県の大学にいた頃加賀友禅などの産業や能登・加賀の農村調査を経験しました。現在は東海市文化財調査委員として万歳の調査などを始めたところです。東海市の町づくりについては、文化人類学の立場から調べ始めています。具体的には「郊外都市」として東海市はどのような町づくりをしているか、です。先行研究では、住民が郊外都市に居住する理由として良好な環境、子供への良好な教育環境、自然とのふれあい（農業ができる）、歴史的文化的環境などが理由として挙げられるようです。地勢的、人口的に東海市は郊外の町です。しかし、郊外都市であることを東海市が意識して町づくりをしているかはいかなかは判然としません。条件は揃っていると思います。ランづくり、星城大学も参加する美化活動、花一杯運動、細井平洲の顕彰など。まだ地元のことはよく知りませんので皆様にはいろいろお教えいただければ幸いです。

【参考】

■プロフィール: 長野県木曽郡生まれ、慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程修了、2003 年より星城大学 リハビリテーション学部准教授

■担当科目: 文化人類学、東洋文化論、総合ことば演習Ⅰ・Ⅱ、文化教養ゼミⅠ・Ⅱなど

■所属学会: 日本オリエント学会、日本中東学会、日本文化人類学学会

■社会的活動: 東海市文化財調査委員

■主要著書・論文

- ・「東海市の往時の万歳について」『研究報告とうかい』第2号 2009
- ・「金沢一伝統・再生・アメニティー」（共）御茶の水書房 1991
- ・「新修根上町史、通史編」根上町役場（共）1995
- ・「東海地域の社会と文化ーブレイン・コミュニティ」（共）御茶の水書房 2002
- ・「新編三好町誌別編（共）」愛知県三好町 2007

飯塚 照史 (いいつか てるふみ) リハビリテーション学部 講師

I 専門分野

整形外科（手外科）分野におけるリハビリテーション、装具療法学、作業療法学

II 研究テーマ

1. 手の怪我とリハビリテーション

III 研究紹介

1. 手の怪我には様々な種類があります。手は脳で考えた日常生活における様々な動作を具体化するために、複雑な動きを行います。これらが怪我などで一旦失われてしまうと、直接的に日常生活における動作の障害につながります。医師により手術などの治療が行われますが、それだけでは十分とは言えません。つまり手術などの後にしっかりとリハビリを行わないと満足できる手の使用が出来ないのです。そこで、手のリハビリテーションでは様々な器具や装具を用いてなるべく良い状態で日常生活に復帰できるようお手伝いしています。怪我をされていない方でも、手のリハビリテーションに対しての基本的な知識があれば、手の状態を自分で管理する事が出来るかも知れません。

【参考】

■プロフィール：島根県出雲市生まれ、広島大学医学部保健学科作業療法学専攻卒業、広島大学大学院医学系研究科博士課程修了（保健学博士）広島土谷総合病院、名古屋掖済会病院、2010年から星城大学リハビリテーション学部

■担当科目：身体障害作業療法学、義肢装具学、ハンドセラピー特論

■社会的活動：NPO 法人ハンドフロンティア理事

■主な著書・論文など

- ・日本手外科学会雑誌投稿論文 3 編
- ・愛知県作業療学会誌投稿論文 3 編など

I 専門分野

リハビリテーション学、健康科学

II キーワード

運動制御、高齢者、転倒、姿勢、平衡

III 研究テーマ

1. 高齢者を対象とした転倒予防のための運動療法の開発
2. 神経筋の老化に関わる運動制御機構の解明

IV 研究紹介

1. 昨今の高齢社会において、転倒予防は重要な課題です。転倒を未然に防ぐには、つまずいたり、滑ったり、ふらついたりなどの転倒のきっかけを極力減らすことが必要です。あるいは、転倒のきっかけが生じて、足を踏み出したり、手を伸ばして手すりをつかんだりする動作によって、転倒を防ぐことができます。一方、老化は転倒を防ぐために必要な筋力や敏捷性などの運動機能の低下をもたらす、転倒を回避する能力を低下させます。私は高齢者を対象とした転倒を回避するための足の踏み出し動作の運動機能を改善させるために効果的な運動トレーニングはなにかという点について研究をすすめています。
2. ヒトは種々の運動や動作を身体各筋が協調的に働くことで巧みに制御しています。しかし、加齢に伴って素早い動きや円滑な動作が困難になることがあります。高齢者が素早く関節を曲げたり伸ばしたりする運動をする際、不要な部位に力が入っていたり、筋の出力と脱力の切り替えがうまくいっていないことがみられます。これらの老化に伴う筋協調性や運動制御の機能低下がなぜ生じるのかを明らかにし、高齢者のリハビリテーションの理論的一助にすることを目的として研究をすすめています。

【参考】

■プロフィール：高知医療学院卒業、名古屋市立大学大学院修士課程修了、2007年より星城大学リハビリテーション学部勤務

■担当科目：物理療法学、医療統計学、理学療法技術演習など

■社会的活動：愛知県理学療法士協会知多ブロック委員

■主な著書・論文など

- ・「機能障害科学入門」2010年、神陵文庫、共著
- ・「理学療法 MOOK16, 脳科学と理学療法」2009年、三輪書店、共著
- ・高ペダル回転数の自転車トレーニングが高齢者の敏捷性に与える効果. 総合リハ 39(5), 2011, 筆頭論文
- ・Stroke patients' perception of an inclined sitting support surface: a comparison between visual and proprioceptive inputs. *J Phys Ther Sci* 20(1), 2008, 筆頭論文
- ・足底面摩擦特性の違いが立位外乱時の下腿筋活動とその適応戦略に及ぼす影響. 理学療法科学 23(1), 2008, 筆頭論文
- ・頸部振動刺激による残存効果が起立動作の重心位置に与える影響. 理学療法科学 21(4), 2006, 筆頭論文
- ・Tilt table 傾斜角度増加に伴う荷重量変化と下肢筋活動の関係. 理学療法科学 20(4), 2005, 筆頭論文
- ・部分荷重動作と筋電図. 理学療法 22(7), 2005, 筆頭総説

など

I 専門分野

公衆衛生学、健康情報学、地域作業療法学

II キーワード

高齢者、リハビリテーション、Evidence-based Practice

III 研究テーマ

1. 健康（医療・介護）に関する情報のあり方（つたえ方、うけとり方）に関する研究
2. 医療・介護における情報共有・意思決定に関する研究
3. 患者・利用者のニーズに関する研究

IV 研究紹介

1. 人々の健康への関心は高まっています。テレビやラジオ、インターネットなどには様々な情報が流れ、個人の意思決定に影響を及ぼしています。社会における健康情報のつたえ方・うけとり方を見直す時期にあるのではないのでしょうか。情報発信者の努力のみならず、情報の受け手である消費者（市民）の情報リテラシーを高めるお手伝いができればと思います。
2. 医療や介護の意思決定場面において、患者・利用者と医療・介護提供者間の情報共有は容易なものではありません。特に、すでに効果が実証されている治療法に関する知見と在宅要介護高齢者のニーズが、リハビリテーションの目標設定やプログラム立案時にどのように反映されているかについて、研究を進めています。

【参考】

■プロフィール：大阪府生まれ

国立療養所近畿中央病院附属リハビリテーション学院作業療学科卒業

京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻専門職学位課程修了（修士（専門職））

総合病院・老人保健施設・通所および訪問リハビリテーション事業所・訪問看護ステーションにて作業療法士として勤務ののち、専門学校専任教員・NPO 委託研究員を経て、2010 年から星城大学リハビリテーション学部講師

■担当科目：（学部）地域作業療法学、基礎作業学、作業療法学特論Ⅲ、作業療法学研究法、ほか （大学院）生活活動学特論Ⅱ

■社会的活動：（社）日本作業療法士協会学会演題査読委員、（社）日本作業療法士協会、日本公衆衛生学会、日本疫学会、日本老年医学会、日本医学教育学会、日本褥瘡学会、ほか

■主な著書・論文など

- 1) Takahashi Y, Ohura T, Ishizaki T, et al. Internet use for health-related information via personal computers and cell phones in Japan: a cross-sectional population-based survey. J Med Internet Res. 13(4):e110, 2011.
- 2) Ohura T, Ishizaki T, Higashi T, et al. Reliability and validity tests of an evaluation tool based on the modified Barthel Index. International Journal of Therapy and Rehabilitation 18(8): 422 - 428, 2011.
- 3) Ohura T, Nishiyama C, Nakayama T. More appropriate, practical outcome measures in clinical trials for rehabilitation: A survey of medical literature from 1996-2005. Asian J Occup Ther 7: 13-22, 2009.
- 4) 米国立がん研究所編. 中山健夫監修. ヘルスコミュニケーション実践ガイド 第一版. 日本評論社, 2008. (分担翻訳)

I 専門分野

運動老年学, 健康支援, 介護予防, 作業療法学

II キーワード

高齢者、運動、体力

III 研究テーマ

1. 地域における高齢者の健康づくり

IV 研究紹介

私は、これまで東海市社会福祉協議会および東海市保健福祉課が主催する運動教室に関わり、参加者への運動指導に関わってきました、その中で高齢者に対しての運動の効果を体力面からデータを収集し研究を行ってきました。

今後も継続して東海市社会福祉協議会および東海市保健福祉課と連携し、運動という面から高齢者の健康づくりのためのよりよい方法を検討するとともに気軽に参加できる運動教室の実施を目指したいと考えております。

【参考】

■プロフィール：沖縄県那覇市生まれ、平成医療専門学院作業療学科卒業、名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科博士前期課程修了（修士：生体情報）、2003 年より星城大学リハビリテーション学部作業療法学専攻教勤務

■担当科目：運動学Ⅰ・Ⅱ、運動学実習、作業療法評価学、臨床運動学、作業療法評価学実習、身体障害作業療法学、地域作業療法学演習、作業療法学研究法演習、基礎作業学実習Ⅰ・Ⅱ

■社会的活動：東海市健康づくり推進会議委員、知多市障害者自立支援認定審査会委員、愛知県作業療法士会現職者共通研修委員長

■主な著書・論文など

- ・転倒予防のためのバランス運動の理論と実際，有限会社ナップ，2010 年，共著.
- ・高齢女性における下肢レジスタンス運動とバランス運動の体力への効果. 星城大学リハビリテーション・システム開発研究所研究紀要 4, p67-74, 2009 年，共著.

I 専門分野

生体工学、身体運動学、ロボット工学

II キーワード

骨格筋配列モデル、高度動作解析法

III 研究テーマ

1. パワーアシスト機構を用いた介護負担の軽減に関する研究
2. 整形外科疾患罹患患者・脳性麻痺児・知的障害者の健康づくりに関する研究

IV 研究紹介

1. 虚弱高齢者の増加に伴い、介護を受ける対象者の増加とともに、介護をする側の身体および精神的な負担度の増加が昨今の問題となっております。特に、身体的な負担度の増加は、介護職の離職率に大きく関わる深刻な要素となっております。そのような社会背景の中、近年ではロボットを用い、介護をする側の負担度を軽減させる試みが行われていますが、コストパフォーマンスの問題において、十分に普及できていないのが現状です。そこで当研究者は、コストパフォーマンスを抑え、一般施設においても普及できる簡易的な介護補助ロボットの開発に着手を始めようとしています。このロボットが開発されれば、介護者の身体的な負担度を軽減させるのみならず、高齢者の就職を促進し、介護職の定職率向上、および人材の確保に関わる社会的意義の高い活動と自負しております。これらの点を踏まえ、介護の方法に関わる諸問題に関してのご相談などに積極的に対応いたします。
2. 日本整形外科学会によれば、整形外科疾患罹患患者は増加の一途をたどっております。近年では、本邦の医療保険圧潰に関わるとされる生活習慣病予備軍、いわゆるメタボリックシンドローム進展にロコモティブシンドロームが大きく関わるということが知られています。近年では、ロコモティブシンドロームの一端が解明されつつあるものの、その予防策に関しては未だブラックボックスの部分が多く存在します、また、脳性麻痺児・知的障害者においては、対象者の疾患構造の複雑性のため、正確な情報さえも存在しておらず、十分な健康維持増進活動の施策がとられておりません。そこで、当研究者は、喫緊に解決策が必要にも関わらず、未だ明らかになっていない整形外科疾患罹患患者・小児麻痺者・知的障害者に着眼点を置き、健康づくりに関わる諸問題を明らかにすることを考えております。

【参考】

- **プロフィール**：愛知県名古屋市生まれ、愛知医療学院理学療法学専攻卒業、大阪電気通信大学大学院医療福祉工学研究科修士課程修了（工学修士）、2010年から星城大学リハビリテーション学部 助教
- **担当科目**：運動器障害理学療法学、運動器障害理学療法学実習、運動学実習、情報処理演習 I
- **社会的活動**：愛知県理学療法士協会学術大会部員、精密工学会生体機構制御・応用技術専門委員会運営委員
- **主な著書・論文など**
 - ・『二関節筋』2008年、医学書院、共著
 - ・『上肢運動器疾患の見方・考え方-関節機能解剖学的リハビリテーション・アプローチ-』2011年、医学書院、共著

I 専門分野

健康支援学

II キーワード

障害者スポーツ, 女性の尿失禁

III 研究テーマ

1. 運動と免疫に関する研究
2. 尿失禁の現状に関する研究

IV 研究紹介

1. 頸髄損傷者のスポーツ参加は、生活習慣病の予防、持久力維持の目的で積極的に推奨されています。しかし、運動は免疫機能に影響を及ぼし、運動強度、継続時間により、その反応に違いがあることが報告されています。私たちは、頸髄損傷者に安全に運動を推奨するために、車いすマラソン競技と免疫機能の関係を明らかにしたいと考えています。
2. 近年、高齢者や障害者の尿失禁が問題視され、その対策が検討されつつあります。しかし、高齢者や障害者の尿失禁には、移動能力や認知機能の要因も関係することから、非常に複雑で明確な対応策が示されていないのが現状です。現在、尿失禁の現状を把握するため、通所介護サービスの利用者を対象にアンケート調査を実施しております。今後は、尿失禁に対する運動療法や各種治療を実施し、その効果を検証したいと考えています。

【参考】

■プロフィール：大阪府堺市生まれ、関西医療技術専門学校卒業、星城大学大学院（保健学修士）、医療法人嘉誠会リハビリテーションセンター勤務、2002 年から星城大学リハビリテーション学部助手、2007 年から星城大学リハビリテーション学部助教

■担当科目：理学療法評価診断学Ⅱ、理学療法評価診断学演習

■社会的活動：日本障害者スポーツ学会事務局、シニアフィットネスリハビリテーション研究会事務局

■主な著書・論文など

- ・「転倒予防・介護予防のための運動器機能向上トレーニングマニュアル」2008 年、株式会社大伸社、共著（第 1 章, 3. トレーニングの基礎知識）
- ・「車いすマラソン競技が頸髄損傷者の免疫機能に与える影響」2010、日本障害者スポーツ学会誌、19 号、25-29p、共著

木村 大介 (きむら だいすけ) リハビリテーション学部 助教

I 専門分野

老年期作業療法学、地域作業療法学

II 研究テーマ

1. 愛知県武豊町一般高齢者施策「憩いのサロン」事業参加高齢者の認知機能に関する研究

III 研究紹介

1. 愛知県武豊町において認知症予防として実施されている一般高齢者施策「憩いのサロン」事業に参加している地域在住高齢者の認知機能経時的変化を、毎年実施している「お元気チェック」にて評価・分析している。これまでの結果から、憩いのサロン参加は、対人交流が活発化され、認知機能に良い影響を及ぼす可能性が示唆された。今後は、認知症予防になり得る要因、例えば外出する回数が多い、知的活動（本を読む、新聞を読む）の習慣があるなど明らかにすることで健康寿命の延伸に寄与していきたい。

【参考】

■プロフィール：愛知県名古屋市生まれ、名城大学商学部卒業、星城大学大学院健康支援研究科修士課程修了（保健学修士）、2007年から星城大学リハビリテーション学部作業療法学専攻助教

■担当科目：老年期作業療法学、地域作業療法学、地域作業療法学演習、運動学実習、基礎作業学Ⅰ・Ⅱ、身体障害作業療法学実習、作業療法学特論（老年期）、生理学実習等

■社会的活動：愛知県作業療法士会編集協力員

■主な著書・論文など

- ・「地域在住高齢者の認知機能低下に関するスクリーニング検査項目の検討」作業療法 30(5) 2011 年
- ・「一般高齢者施策参加高齢者の認知機能低下の割合」作業療法ジャーナル 45(9) 2011 年
- ・「血管性軽度認知機能障害（MCI）の高齢女性に対する心理面からの介入プロセスを日常生活支援において共有できた事例」認知症事例ジャーナル 2(3)、2009 年
- ・「認知症の作業療法」 pp152-157、198-204、2009 年、医師薬出版株式会社

I 専門分野

内部障害

II 研究テーマ

1. メタボリック症候群に関する研究
2. 身体活動量と加齢に関する研究

III 研究紹介

メタボリックシンドロームは中高年になって突然発症するものではない。予防には若年期より生活習慣に留意する必要があると考えられるが、メタボリックシンドロームの検診義務は 40 歳以上のため、若年成人層の実態は余り把握されていない現状がある。また、活動的な日常生活を過ごすことや運動が健康づくりに必要かつ不可欠であることは既に一般にも広く知れ渡っている。しかし、効果的な運動の量や強度、また効果的な身体活動については、まだはっきりと理解されていない。

私は、本校男子生徒を対象に、若年成人層のメタボリックシンドロームに関する実態調査を進めている。学内で一日の大半を過ごし、皆がほぼ似通ったような生活を過ごしているように思われるが、その体型は様々である。学生の身体測定とともに生活実態を詳細に分析することで、将来、メタボリックシンドロームになることを回避する手立てが明確になるものと考えている。

また、研究成果を広く発信することで、地域の皆様の健康づくりに還元できればと考えている。

【参考】

■プロフィール：和歌山県和歌山市生まれ、神戸大学医療技術短期大学部卒業、和歌山県立医科大学大学院医学研究科修士課程修了、2008 年から星城大学リハビリテーション学部 助教

■担当科目：内部障害理学療法学、研究法演習、理学療法演習Ⅱ、生理学

■主な著書・論文など

- ・ 離床・低活動による循環調節予防と治療における理学療法士としての取り組み. MB Med Reha, No.72:71-78, 2006
- ・ Longitudinal changes in physical capacity over 20 years in athletes with spinal cord injury. Arch Phys Med Rehabil. 2010 Aug;91(8):1262-6.

I 専門分野

作業療法学、上肢装具学、上肢バイオメカニクス

II 研究テーマ

1. 上肢装具の開発
2. 人体関節角度計測システムの開発

III 研究紹介

1. 変形や拘縮予防、あるいは矯正や機能改善を目的に装具が使用されます。装具を必要とする方々に対し私たちは装具を製作することも多々ありますが、装具が関節や周辺組織に与える影響については詳細には検討されていません。そこで、装具が関節に与える影響について工学的に検討し、最も適した装具を開発していきたいと考えております。装具の製作に関心があり、協働の事業をお考えの場合は、お気軽にお問い合わせください。
2. これまでに電気角度計を使用し、活動を遂行するための手関節、手指関節の角度について研究を行ってきました。しかし、手指関節は小さく、電気角度計も手指関節に応じた大きさである必要がありますが、電気角度計の大きさの限界により中には十分に計測できない関節もあります。また、動作中の関節角度を計測するためには動作を妨げず、なおかつ小型で軽量である必要があります。そこで、あらゆる関節角度を計測できる関節角度計測システムを開発したいと考えております。関節角度計測システムの開発に関心があり、協働の事業をお考えの場合は、お気軽にお問い合わせください。

【参考】

■プロフィール：平成医療専門学院作業療学科卒業、岐阜大学医学部附属病院リハビリテーション部を経て、2006年から星城大学リハビリテーション学部勤務

■担当科目：運動学、臨床運動学、身体障害作業療法学など

■社会的活動：社団法人 日本作業療法士協会 学会演題査読委員

■主な著書・論文など

- ・ The Motor Function of Fingers in Limit of Metacarpophalangeal Joints ROM: Compare with DASH. the Congress of the Asian Pacific Federation of Societies for surgery of the Hand (International proceedings), 17-20, 2008.
- ・ 関節リウマチ患者の人工 MP 関節置換術における動的伸展装具と Alternating static splint の術後成績の比較. 日本義肢装具学会誌, 24(3), 182-184, 2008. 他

I 専門分野

保健医療福祉学、理学療法学

II キーワード

健康増進

III 研究テーマ

1. 健康増進目的によるシティマラソンへの参加が心身に及ぼす影響について

IV 研究紹介

1. 近年、健康増進を目的として市民マラソンへ参加する人々が増えてきています。しかし、マラソン参加が心身に好影響を与えることが一般市民に浸透されつつあるが、安全性かつ快適性を実際に調査した報告はみられません。そのため私達は、事前のトレーニングも含めての市民マラソン参加が心理面においては不安が軽減され活気のある状態を形成し、身体面においては筋骨格器系に対しても負担がなく実施できるスポーツであるかどうかを検証しております。

そのため、老若男女問わず、「運動」という観点から、市民の積極的健康支援に関わって行きたいと考えております。

私の研究や活動に関心をお持ちいただき、協働の事業をお考えの場合は、お気軽にお問い合わせください。

【参考】

■プロフィール：愛知県豊明市生まれ、国際医療福祉大学保健医療学部卒業、介護老人保健施設椿寿荘、浜松医科大学医学部附属病院にて理学療法士として勤務。2009年から星城大学リハビリテーション学部助教

■担当科目：実習関連

■社会的活動：日本理学療法士協会会員、東海スポーツ傷害研究会会員、日本股関節学会会員

■主な著書・論文など

- ・健常若年者における 10km マラソン完走者の身体特性の調査。第 20 回愛知県理学療法学会誌
- ・前十字靱帯再建術後のスポーツ復帰に関係する因子の検討（第 2 報） 術後 6 ヶ月でスポーツ復帰基準を満たさなかった群に再指導を実施した結果の検討

I 専門分野

運動老年学、応用健康科学

II キーワード

地域在住高齢者、介護予防、運動処方

III 研究テーマ

1. 地域在住高齢者に対する効果的な複合運動プログラムについての研究
2. 地域で行うラジオ体操活動がもたらす身体機能、地域結束力への効果に関する研究

IV 研究紹介

1. 今日、健康維持のために必要な運動は、有酸素運動、レジスタンス運動（筋力トレーニング）、柔軟運動の3種類とされており、高齢者では、これら3種類の運動にプラスし転倒を防止するためのバランス運動の実践が必要とされています。一方でこれらの運動は、単一運動として実施するよりも、複数の様式を組み合わせる方が相乗的な運動効果が期待できると報告されています。しかし、これまでの複合運動に関する研究は、有酸素運動とレジスタンス運動を用いた複合運動が中心であり、高齢者に必要とされるバランス運動を加えた複合運動の効果は明らかにされていません。そのため、本研究では、バランス運動を加えた複合運動プログラムの効果を明らかにすることで、地域在住高齢者の方に対して、より効率的で効果的な運動方法の提案を目指しています。
2. 長寿高齢社会のわが国では、健康寿命延伸に向け、科学的知見を踏まえた運動習慣や運動継続促進のための介入策が求められています。高齢者の運動習慣に関して、平成21年度の「健康・スポーツに関する世論調査」（2010年、内閣府）によれば、週3回以上運動を行った60歳代の割合は46.6%、70歳以上は60.1%と年々増加傾向にありますが、その一方で運動実施回数が1ヶ月1-3日以下といった運動非実践高齢者の割合は、過去約30年間25%前後を推移し、ほとんど変化がみられていません。そのため、こうした運動に消極的な高齢者を対象とした運動導入や運動継続に関する支援が、介護予防や医療費削減の観点からも求められています。本研究では、高齢者にとって馴染み深く、地域活動として行われてきた背景もある「地域で行うラジオ体操活動」が、運動に消極的な高齢者の運動導入に活用できるか否かを検討するとともに、地域で行うラジオ体操活動がもたらす身体機能、QOL、地域結束力（ソーシャルキャピタル）への効果を明らかにすることで、取り組みやすく、継続しやすい地域在住高齢者の健康づくり方法の提案を目指しています。

【参考】

- プロフィール：愛知県名古屋市生まれ、名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科博士前期課程修了（修士：生体情報）、2011年より星城大学リハビリテーション学部作業療法学専攻助手
- 担当科目：基礎作業学実習（一部担当）
- 社会的活動：NPO法人アクティブエイジング研究会会員

I 専門分野

健康支援学、作業療法学

II キーワード

健康支援、介護予防、作業療法

III 研究テーマ

1. 介護予防事業参加者の参加継続要因に関する研究

IV 研究紹介

高齢者が自立した生活を営むためには、心身機能を維持することが重要です。この機能を維持するための一つ的手段として運動を継続することが良いとされています。しかし、運動を継続することが難しいと報告されています。各自治体では様々な運動教室を展開していますが、ほとんどが 2～3 ヶ月間と短期間の開催です。また、運動教室終了後のフォローアップがなく、運動を長期に継続することへの対応が充分であるとは言い難いです。定期的な運動をしない高齢者も存在しており、ハイリスク高齢者においては主体的に運動教室に参加することも容易ではありません。一方で運動教室への参加がきっかけとなり、運動教室終了後も自主グループ活動など何らかの運動を継続している高齢者もいます。主体的に運動を継続する高齢者を増やし、支援していくことが健康寿命の延伸に繋がると考えられます。そのため、運動教室の参加継続要因を明らかにし、参加者を増やすことや運動を辞めてしまうことへの対策の基礎資料を作成したいと考えています。

【参考】

■プロフィール：熊本県生まれ、星城大学リハビリテーション学部作業療法学専攻卒業、作業療法士、星城大学大学院健康支援学研究科修了、東海記念病院の勤務を経て、2011 年より星城大学リハビリテーション学部助手、修士（保健学）

■担当科目：実習補助等

■社会的活動：（社）日本作業療法士協会会員、愛知県作業療法士会会員、星城大学リハビリテーション研究会運営委員

■主な著書・論文など

「運動教室で高齢者の筋力が向上するために必要な期間に関する検討」. 愛知作業療法, 第 18 巻, 3-7, 2010

大学院

健康支援学研究科

植松 光俊（うえまつ みつとし） 大学院健康支援学研究科 教授

I 専門分野

リハビリテーション科学・福祉工学、運動学、応用健康科学

理学療法（リハビリテーション）、転倒予防・介護予防、生活介護福祉機器開発

II 研究テーマ

1. 高齢者の転倒予防トレーニング効果、転倒予防、介護予防、トレーニング

III 研究紹介

企業や研究所との共同研究として、①運動機能評価機器共同開発：ハンドヘルドダイナモメーター（徒手筋力測定器）、フルオートマチック歩行動作分析機器、フルオートマチック姿勢動作分析機器、②介護予防パワートレーニング機器および外乱バランストレーニング機器の共同開発研究、③健康支援機器開発（歩行解析アドバイスシステムツール「歩ビゲーター」）の産学協同研究、④ロボット動作研究チーム客員研究員として介護支援ロボット開発の産学協同研究などを実施している。

【参考】

■プロフィール：大阪府大阪市生まれ、大阪経済大学経営学卒業、株式会社リハステージ代表取締役、昭和大学医学部リハビリテーション診療科特別研究員医学博士修了（医学博士）、2002 年から星城大学リハビリテーション学部教授、2006 年同学リハビリテーション学部長、2008 年同大学大学院健康支援学研究科長

■担当科目：医療学入門、理学療法学概論、理学療法技術演習Ⅰ、理学療法技術演習Ⅱ

■社会的活動：日本理学療法士学会理事、日本理学療法士連盟会長

〈国内〉日本理学療法士学会、日本義肢装具学会、日本リハビリテーション工学協会、日本体力医学会、臨床歩行分析研究会、日本リハビリテーション医学会、シニアフィットネスリハビリテーション研究会（会長）

〈国際〉国際義肢装具連盟、北米リハビリテーション工学連盟、国際バイオメカニクス学会

■主な著書・論文など

「高齢者の歩行中の関節モーメント」関節モーメントによる歩行分析：（医歯薬出版）1997.

「高齢者の歩行」理学療法 MOOK 6・運動分析（三輪書店）2000.

「Q&Aフローチャートによる下肢切断の理学療法(第3版)」 （医歯薬出版）2002.

「理学療法士プロフェッショナルガイド」（文光堂）2003.

「アドバンス版図解理学療法技術ガイド」（文光堂）2005.

「図解理学療法検査測定ガイド」（文光堂）2006.

「体表解剖と代償運動」（医歯薬出版）2008.

「中枢神経系障害理学療法学テキスト」シンプル理学療法学シリーズ編集（南江堂）2008.

「転倒予防・介護予防のための運動器機能向上トレーニングマニュアル」監修（大伸社）2008.

I 専門分野

生体情報工学、神経筋生理学、健康・福祉工学

II キーワード

重症心身障害、情報通信技術、在宅生活支援、神経筋生理学、筋音図

III 研究テーマ

1. 情報通信技術 (ICT) を活用した重症心身障害児の在宅ケア支援システムの開発
2. 重症心身障害児施設入所児(者)の実態調査の分析
3. 筋音図の基礎と応用に関する研究

IV 研究紹介

1. 「重症心身障害児」とよばれ、重度の運動障害と知的障害を重複した人たちの在宅ケアを支援するために、テレビ電話やバイタル信号通信機器などを活用して遠隔診療をしたり、生活相談を行う ICT システムの研究開発を行っています。この ICT システムは高齢者や慢性疾患のある方たちの在宅療養にも役立つと考えています。

(情報技術 (IT) を活用した重症心身障害児 (者) の在宅支援 II. IT システムの開発と実証運用. 重症心身障害学会誌 32 (1): 99-105, 2007)

2. 重症心身障害児の約 1 万人の方が全国の公立、法人立の専門施設に入所されています。約 30 年にわたって、施設に入所されている方たちの生活の実態を調査しています。また、その調査資料 (データベース) を詳細に分析していますが、より快適な生活ができるように役立てたいと思っています。

(公法人立重症心身障害児施設入所児(者)の実態調査の分析ー病因別発生原因とその経年的変化ー. 重症心身障害学会誌 33: 311-326, 2008)

3. 筋は筋線維という細長い細胞の束で構成されています。私たちが体を動かそうとすると、この筋線維が収縮して力を発揮します。この時、筋の体表面に微細な振動が発生します。これを高感度のマイクなどで記録したものが筋音図です。私たちは、筋音図を記録するセンサーや計測機器を開発したり、筋音図を使って筋の収縮するメカニズムを調べたり、筋疾患の診断に役立てるための研究をしています。

(筋音図法の基礎. 臨床脳波 50 (11): 649-656, 2008)

【参考】

■プロフィール：岐阜県多治見市生まれ、岐阜大学工学部卒業、日本電気株式会社、愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所・部長、川崎医療福祉大学・教授、2008 年度から星城大学大学院・教授 (工学博士)

■担当科目：＜大学院＞生活支援工学特論、生活支援工学演習、健康支援学研究法、健康支援学特別研究、生活行動科学特論、生活行動科学演習、医療福祉支援学特論、発達障害系リハビリテーション学演習、＜リハビリテーション学部＞ものづくり論基礎、ものづくり論応用、バリアフリー環境論

■社会的活動：日本重症心身障害児福祉協会 (理事)

■主な著書・論文など

下記のインターネット文献検索サイトなどへアクセスいただき、ご覧下さい (キーワード: 三田勝己、あるいは、Mita K)。 <http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/> <http://www.jamas.or.jp/>

星城大学 研究シーズ集

2009 年 11 月 初版

2012 年 9 月 改訂第 5 版

編集・発行：星城大学 地域センター

連絡先：

〒476-8588 愛知県東海市富貴ノ台 2-172

星城大学 地域センター

Tel：052-601-6000（代表）

e-mail：koryu@seijoh-u.ac.jp